

池窪弘務作品集 1 小説 3

[ホームに戻る](#)

目次      リンクをクリックして下さい。

[作品 1](#)

失われた言葉の断片

星と泉 6号 (2010年)

[作品 2](#)

フーテン

[【後記】](#)

僕はずっと何かを思い出しかけていた。捉えがたい韻律、失われた言葉の断片。(中略)。思い出しかけていた物は意味のつてを失い、そのままどこかに消えてしまった。永遠に。

「グレート・ギャツビー」スコット・フィッツジェラルド・村上春樹訳

1

会社は朝の九時から始まる。八時四十五分に会社に入る。門の守衛室の前を通り、ビルの入り口でカードを通す。女子ロッカーで制服に着替える。いくつかの部屋を通って、商品開発部2に入る。「おはようございます」が飛び交う。席についてコンピュータの端末に電源を入れる。「カチリ」。小さく端末に「おはよう」と言う。端末が立ち上がるまでに、机の上を濡れティッシュで拭く。終わるとティッシュはゴミ箱に捨てる。IDとパスワードの入力画面

になっている。素早く入力する。朝一番の決まり切った手順。

部屋は辞書課と関数電卓課に分かれている。区切りはない。机が固まっているだけだ。それぞれの課に主任がいる。関数電卓課にはS主任。辞書課にはお局つぼね。

商品開発部1（プログラミングの仕事をしている）も辞書課と関数電卓課に分かれていてそれぞれに主任がいる。四人の主任の上に部長がいる。たった一人の管理職だ。

商品開発部2の仕事はバグ取り。すなわち、プログラムのチェックだ。プログラムそのものをチェックするのではない。そんな技能は私達にはない。マニュアルに従って、実際の数式を入力、答合わせをする。不正解を見つけ、商品開発部1で修正する。商品開発部1も2も社員は数名だ。商品開発部1のプログラマーも商品開発部2の私達（プログラミングは出来ない）もほとんどが派遣社員だ。

私は関数電卓科に五年いる。古株だ。人の出入りが激しい。ほとんど二、三年で辞めていく。仕事を

覚えるには時間がかかるから派遣先が変わる人は希だ。この会社でしか通用しない仕事だ。だからいくら仕事が出来ても、会社を変われない。一番古いのは山下さん。子供が二人いると聞いた。

私は誰ともプライベートでは付き合わない。まあ、仕事場以外でも友達はいないけれど。仕事の愚痴。誰と誰とがつきあっているとか。人事の噂。芸能ゴシップ。ニュース。つまらない事ばかりだ。ニュースはNHKの夜の九時でまとめてみる。新聞はとっていない。安倍晋三内閣発足。私には関係がない。只、あの高い声が嫌いだ。孤独な管理職、部長とよく似ている。激すると、トーンが高くなる。声がうわずってくる、「ああ、こらあかんわ」だ。誰も引き時だと知っている。理由をつけて逃げ出す。

処女も何年前前に、ゆきずりの男にあげてしまった。邪魔だったから。何にも感じなかった。避妊には細心の注意をした。ゆきずりの子供なんてしやれにもならない。動物的な行為に、愛とか恋とか言うのが嫌だった。身体の上を男が過ぎ去っていった。ああ、こんなものかと思った。一種の儀式だった。

二度と会わない。顔も忘れた。

仕事は嫌いでも好きでもない。一人でやることが多い仕事だから、私に向いていると思う。「やり甲斐」の面から見れば全くない。スパツと真空だ。時間を切り売りしている。昇級も出世も無縁だ。五年間で時給が五円上がった。不安定な仕事だ。明日から来なくてもいいよと言われれば、明日から失業する。京大出の人もいる。いや、いた。

一つ仕事をあげれば一つ関数電卓が世の中に出る。誰が使っているのか全く分からない。それでもバグは出る。最悪、回収。それが重なれば首が飛ぶ。幸い私は頭がよいからそんな事態にはならない。本当かと自分で突っ込みを入れる。つまらない仕事でも食べるために働かなければならない。資格も才能もない私に仕事があることを感謝しなければならぬ。自分の結婚なんて他人事みたいだ。だけど、結婚はすごいことだと思う。特に子供ができるということがすごい。死は不思議ではないけれど、誕生は不思議だ。父母が寝て、私が生まれた。どこから私なのだろう。元を辿れば精子と卵子だ。私は私の卵子

をせつせと一ひと月に一回流している。男はいらないが子供は欲しいと言っていた社員がいたけど、分かる気がする。でも、今の私はどちらもいらぬい。

Kさんと挨拶する。

「おはよう」

「おはよう。村瀬さん、三丁目の夕日見た」

「見てへん」

「絶対見た方がええ。ほんま泣いた」

「そう」と私。

Kさんは社員さんだ。身長は百六十cmぐらい。私よりも低い。だけど部分、部分は大きい。頭も、手も、多分足も。体重は七十kgはあると思う。身体が規格外なのだ。液晶生産工場の見学に行った時、ど  
の手袋も入らなかつたらしい。だから、硝子越しに  
外から見学した。宇宙服みたいな服を着て、外から  
見ていたって。宇宙遊泳でもやりそうだった。外か  
らなら、普段着で見られたのにと、S主任が笑って  
いた。

黒い縁の眼鏡をかけている。

私はKさんの二年先輩だ。入社してきた頃、Kさんは社内いじめにあった。鈍くさいと男子社員は言い、女の派遣は体臭がすると言った。体臭を言ってきたのが口臭のきつい女だったので笑ってしまった。私には、鈍くさいと言うより、一つ一つを確実に重ねていく人のように思えた。気転とかは後についてくるタイプなのだ。その印象は当たっていた。

四人の主任と部長が集まって一週間に一回会議を開く。残業はつかない。私達は「馬鹿ちよん」と呼んでいた。

「馬鹿ちよんでKさんの体臭が問題になったんやて」

広報係が言ってきた。体臭を議題にする会議なんてなんだろう。残業がつかないのは当然だ。

「部長がS主任にKさんに話せと命令したんやて」  
部長の切り札は問答無用の命令だ。団塊はこれだから嫌われる。

S主任は気の小さい人だし、部長は嫌なことを彼に押しつける。私は部長が嫌いだ。部長を好きなのは、お局つぼねだけだ。最年長の女性社員で、美人だ。

部長のスパイでもある。彼女にはスパイだという意識がない。キャリアアウーマンという意識しかない。アホな女が頭の切れるOLを演じているのだ。

課の全員が部長を嫌っている。だが管理職がこの部署では彼一人というのも現実だ。特に派遣は彼の意向でやめさせられることもある。でも、ゴマをすする派遣はいない。ゴマをすれば社員や、派遣から自分のはじき出される。そちらの方が辛い。

S主任は、いつもの歯切れの悪い話し方で、「言いにくいことやけど、君のためでもあるし、裏でそこそ言われるのも嫌やろ」と、長い沈黙の後、話し始める。

Kさんは背の高いS主任の前に、上品に手を膝の上に置いてぽつんと腰掛けていたのだろう。

次の日から、ロッカーで上半身裸になって、身体を拭き始めたという。当然私は見たことがないけれど。酒を飲むと、財布からなにか持っているものを手当たり次第なくしてしまわらしい。通勤のために買った高額な自転車も、鍵を失ってしまった。そんなことは仕事がうまくいくようになってから聞か



ないから、多分いじめが原因だったのだろう。私の知っているKさんは静かに、ニコニコしながらお酒を飲む人だ。

Kさんは喜怒哀楽を表に出すことがほとんどない。でも無表情ではない。人と話す時はニコニコしている。あわてる時はあわてる。それ以外はボーとしている。とにかく寡黙な人だ。

Kさんは多趣味だ。映画鑑賞。スーパー銭湯。うんちく。

「近鉄の南大阪線と他の近鉄線は線路の幅が違うんですよ。なぜなら、最初の目的が関西本線と提携して……。だから他の線に乗り入れが出来ない」

なるほどと感心する。阿倍野橋から出る電車は吉野駅で行き止まりだ。大阪線や京都線から来る電車は八木駅や橿原神宮駅で乗り換える。「それがどうしたん」と突っ込みを入れない。「へえ、ほんま」と感心する。Kさんの笑顔がとびっきりだからだ。

中でも一番の趣味は野球観戦だ。甲子園のチケットを何枚も私に見せた。ちよつと得意げでもあった。

甲子園に女の同僚と一緒に行くこともある。一人で

福岡ドームに出かけたり、神宮球場に行くこともあるそうだ。

今ではKさんは誰にでも好かれている。悪口を言う人はいない。

今年の四月、芦屋川の堤防で偶然Kさんを見かけた。ふとその気になって、満開の桜を見に来たのだ。西宮の夙川は混むから、こちらに来た。桜が好きだ。この時期は出来るだけ沢山の桜を見て歩く。桜宮、大阪城、神戸、京都。同じ場所に行かない。桜の期間は短い。あつという間に過ぎる。

その日も、ゆっくりと桜を見上げながら歩いた。もう少しすると散るだろう。だから、次の休みには桜はない。満開の桜が好きな私には、今年、最後の桜だった。

Kさんは五、六人の男の人と河原でバーベキューを囲んでいた。私の知っている人は誰もいない。その人達は野卑な感じがした。笑い方も嫌だった。酔い方も下品だ。Kさんだけが上品で浮いているような気がした。いつものようにニコニコ笑っている。

大声で「六甲おろし」を歌っている。Kさんは歌わない。野球観戦仲間なのだろう。なぜか、見てはいけないものを見てしまった気がした。声もかけずにそつとその場を離れた。しばらく肉のにおいが体から離れなかった。

この日のことは誰にも言わなかった。Kさんにも言わなかった。忘れようと思った。だが、いつまでも心の隅に残っている小さな棘のように忘れることはなかった。

Kさんは大勢の人に囲まれながら、親しそうに肩を叩かれながら、散っていく桜みたいにとても孤独なように思えた。

2

お誘いがあった。Aの送別会。女の派遣社員だ。

こいつとは二ヶ月程組んだけれど、迷惑だった。期限が迫っているのに、定時にさっさと帰ってしまう。突然休みを取る。何とか断る理由を考えたが、それも面倒になった。いつも断っていれば、はじき出さ

れる。

送別会は最悪だった。まず会場にカラオケがあった。音痴の私には歌えない。昔、歌うと、般若心経かと言われた。それから絶対歌わない。歌うもんか。誰も聞きたくないと思うけど。みんな上手いよ本当に。紋切り型の部長の乾杯で始まり、宴会は盛り上がってきた。私は酎ハイを結構飲んだ。他にすることがない。酒に酔ったことがない。S主任がいつものように酔っていく。「座布団、座布団」の音が飛ぶ。目がすわるから、座布団。あつ、お局の胸をガバツとつかんだ。つまらない駄洒落を飛ばすI主任は完全にまわっている。多分このあたりの記憶はないだろう。その点若い子は適量を心得ているから上手に飲む。この職場はみんな仲がよい。あまり利害関係がないからだ。出世争いなんて、ほんとうに二、三の人のことだ。派遣なんて、ひっくり返っても出世なんて関係がない。

「村瀬さん1曲」

きた。とんでもないというふうに手を振る。でもしつこい。だが、嵐はいつか過ぎる。お調子もんが

歌い始める。一次会が終わりに近づくと、私は社員  
のUさんにそつと言う。「ごめん、今日は帰る」。  
彼は自分が選ばれたのが嬉しい。「そう、また」。  
分かった、分かったという顔をする。そつと、集団  
から離れる。「村瀬さん帰ったの」。質問に彼は答  
えてくれる。「用事があるんだって」

私は美人だ。だが、好かれる美人ではない。とこ  
とん嫌われる美人だ。多分ブスでもこんな美人にな  
りたくないだろう。

帰り道にKさんが歌った「ルビーの指輪」を口ず  
さむ。Kさんは本当に上手い。顔を頭に浮かべない  
方がいい。目を閉じて聞いたけど。

私もあんなに歌えたら、人生変わっていたかも知  
れない。今頃はAの舌足らずな挨拶が始まっている  
だろう。

「短い期間でしたけれど、みんなに迷惑ばかりで、  
ありがとうございます」

多分そこで嘘泣きをする。そして、気のあったも  
の同士が二次会に流れていく。きっと、明日は二日  
酔いの顔が並ぶ。

夏が去っていく。残暑は厳しいけれど、夜になると秋の風がまじる。思い切り背伸びをする。

一人は寂しいけれど自由だよ。

\*

二〇〇六年十月一日（日）。私はこの日を多分一生忘れないだろう。

ひと月に一回か、ふた月に一回ぐらいの割合で休日出勤がある。締め切りが迫った時だ。もちろんない時もある。水曜日に「ごめんやけど、土日どっちか出てくれへんか」と、S主任から言われた。組んでいる子は多分断ったのだろう。「いいですよ。日曜日に出ます」と言った。Kさんと打ち合わせをしている時だった。たくさん引き受けると、日曜日なのに暇なんだなあと思われる。

守衛さんに「おはようございます」と挨拶をして、鍵をもらい、カードを通して、ビルに入る。人気の

ない廊下を歩く。足音が響く。静かだ。違う会社に入ったようだ。

朝から雨が降って、やっと秋めいてきた。昨日までは暑かった。「暑いざんしょ」と、アホなI主任が言っていた。でも、この部屋には残暑はない。一年中が同じ季節だ。誰もいない仕事場は奇異な気がする。何かは抜け落ちているような感じだ。人の影だけが、行き交っている。明日になれば、実体が動き出す。一日一日が同じ日を刻む日めくりのように過ぎていく。

お昼はコンビニで買ってきた缶コーヒーとパンを食べた。意識していないのにいつもの休み時間に合わせている。そんな自分が嫌だ。

コン、コンと部屋をノックする音が聞こえた。とても控えめな音だ。私は慌てて、食事を済ませた。食べている姿を人に見られるのが嫌いだった。だから、いつも職員食堂では一人で食べている。また、コン、コンと部屋をノックする音が聞こえた。パンの袋と、空き缶をバックに入れて立ち上がった。

「Kです」

私はドアを開けた。照れくさそうにKさんが立っていた。

「近くに来たもんやから」

「雨、止んでた」

「まだ降ってる」

窓からは雨が見えない。時々下を通る人の傘が開いている。

「仕事進んだ？」

「うん、もうちょつとやね」

「じゃまかあ」

「ううん、全然。私も休んでたし」

缶コーヒーをKさんは差し出した。二本も飲んだら、おしっこが近くなるなあ、と頭の隅で考えた。

Kさんは私の前にちょこんと腰掛けた。この人に男だという怖さはない。突然狼になる危険性はゼロ。安心なのだ。

二人だけで話をしたのは初めてだった。トリック・劇場版2が話題になった。仲間由紀恵と阿部寛のコンビ。貧乳と巨根。超常現象とトリック。テレビの深夜枠から始まり、人気になった。私はビデオ



で見た。面白い。常識の枠を上手く外している。無意味なもの面白さ。それが、段々つまらなくなり、トリック・劇場版2で息絶えた。でも、Kさんはそうではなかったらしい。ガッツ石松虫についてのうんちくを喋っていた。トリック・劇場版2で出ていたかしら。とにかく私は一人で映画館で見たのだ。面白かったと私もKさんに合わせた。本当は途中から眠ってしまった。こちらが決めセリフを言う番だ。

「全部お見通しだ！」

話が途絶えると、部屋の静けさが増した。

「九月に神宮球場にヤクルト・広島を見にいったん」

「どっちが勝ったん」

「ヤクルト、8対5」

また、話が途切れた。そういえば一日有休を取っていた。連休の前だから、旅行にでも行くのかと思っただ。

実家は広島らしいから、カープ・ファンかも知れない。パリーグもよく見に行くから、特定の球団が好きだというのではないのかも知れない。話の内容

からも、そんな感じがする。野球のファンなんだ。

「中日で決まりやね」

私が言った。

「そうや。今日は雨で中止。チケットもってんのに。もう終わりやなあ。払い戻して帰りますわ」

大きく伸びをして、言った。白いカッターシャツにブレザー、ノーネクタイ、いつもの服装だった。

「まだ、プレーオフや日本シリーズがあるやん」

「プレーオフはええわ。仕事もようけあるし」

Kさんはいつものようにニコニコして言った。

「これサーティワンで買<sup>こ</sup>うてきてん」

「おおきに」

私は、Kさんが帰った後、アイスクリームを一人で食べた。Kさんと一緒に食べてもよかったのに。

Kさんは自分の分を多分持って帰った。どこで食べたのだろう。無神経な自分が嫌になった。

Kさんが置いていったスポーツ新聞を足を組んで読んだ。まるつきりおっさんだ。

仕事は午後三時頃一段落した。雨の御堂筋を梅田まで歩いた。なぜかその日は沢山歩きたかった。K

さんに対する無神経な自分を忘れたかった。結局、Kさんの気持ちを遊んでいたのだ。

阪急百貨店で少し贅沢な総菜を買った。休日は、繁華街も少しゆったりとしている。いつの間にか雨は止んでいた。

3

仕事場の雰囲気はどこか違う。社員が真剣な表情で話し合っている。いつもなら仕事が順調に動き出す、午前十時前。私はKさんが入社していないのに気づいていた。

「どないしたん」

側を通りがかった新入社員に聞いた。

「Kさんが来たはらしませんねん」

「また、寝過ごしてんのちやうの」

以前にもそんなことがあったから、私は言った。

「携帯にも出はらへんし」

断片的に情報が入ってくる。

昼頃同期の社員さんがアパートに行った。鍵はかかっていて、呼び鈴を押しても応答がなかった。管理会社に鍵を開けてもらうようかけ合うが、断られた。アパートの借り主が、父親になっていて、その立ち会いでしか開けられないとのことだ。警察に行ったが事件性がないと開けられないということでダメだった。

「そんなん、中で死んでるかもしれへんやん」

日頃から、思ったことを直ぐに口に出す女が言った。とにかく父親が来るまで待つしかないらしい。Kさんはどこへ行ったのだろう。昨日は何も変わったことがなかった。いつものように喋り笑っていた。でも、なぜ私に会いに来たのだろう。何か用事があったのか。用事……。彼はそれを私に告げなかった。いや言っていたかも知れない。私は頭の中で昨日のビデオテープを回した。時々スローにした。でも、何も見つからなかった。全て世間話だった。

外線電話が鳴った。お局が電話を取った。

「お父さんの電話番号が分かるの？ 多分会社だろ

うから、そっちにかけるわ。携帯もお願い」

「お父さんって何処」

「広島やて」

横で部長がうろついている。誰も相手にしない。

孤独なオランウータン。

そのうち昼になった。私は昨日のことを言わなかった。急に会社が嫌になったのだろう。そんなことは誰にでもあることだ。昼ご飯はみんなのテーブルで食べた。なぜか群れたかった。

「メールを送ってるんやけどね」

「お父さんは昼過ぎの新幹線で来はるらしい」

事件なんて滅多に起こらない職場で事件が起こった。みんな興奮している。

「私も携帯にかけてみようかなあ」

私は何気なく言った。意外だという感じで、みんなが私に注目した。

「私 a u。Kさんの番号を送って」

「私も a u」派遣の子が言って、赤外線通信でKさんの携帯の番号をもらった。

早速かけてみる。出て欲しいと願った。すぐに、乾いたメッセージになった。電源が切られているらしい。

「あかんわ」

箸を止めて待っていた同僚は、機械的に箸を動かし始めた。ネットで検索してる人もいるらしいが、琵琶湖でメダカを探すようなもんだろう。

帰社の時間になっても、行方は分からなかった。午後六時に、メールを送った。『心配しています。連絡を下さい。村瀬』。ちよつと、考えたが名前も

書いた。村瀬玲れい。

Kさんの部屋は空っぽだった。空き巣に入られたのかと思うほど乱雑だった。その疑いは直ぐに消えた。男の一人住まいって、そんなもんだよと誰かが言った。分厚い野球の入場の半券がゴムバンドで縛ってあった。父親が、「異常だ」と言った。父親はとても快活だった。とても。

妹も一緒だという。

帰りの廊下ですれ違った。S主任とお局、年配の男と若い女性。父親と妹なんだろう。妹を私はちらっと見た。美人だ。スタイルもいい。とてもKさんと兄妹とは思えなかった。

何処にも寄らずにマンションに帰った。寄り道をする気にもなれなかった。買い置きの日清のどん兵衛を食べた。三分間待つ間、何回も携帯を見たが、誰からも入っていないかった。今日は早く寝よう。とにかく明日だ。全てを時間が解決する。だが何でこんなに気になるのだろうか。他人に無関心なはずの私が。明日照れ笑いを浮かべながら、出社してくるKさんを想像した。多分、部長は欠勤だと怒るだろう。だが、こうも考えた。どこか違う場所で生きている。だが、Kさんは私の想像が及ばないことをしていた。私が考えることを避けていたとも言える。

携帯電話が鳴った。メールだった。午前二時。こんな時間に。

『大分東署の森田と申します。こんな時間にすみません。お知らせしたいことがあります。次まで電話

をして下さい (097)533-XXXX』

大分東署に電話した。太い声の男が出て私が森田さんの名を言うと、電話口に森田さんが直ぐに出た。この声も大きい。

「村瀬です」

「村瀬玲さんですね」

「はい」

「あなたが午後六時にメールを送った人についてお伺いしたいんですが」

「Kさんです」

「フルネームは？」

「……」

思い出せなかった。

「会社の同僚です。Kさんがどうかしたのですか」

一瞬の間があった。

「亡くなられました」

「亡くなった……」

「多分自殺だと思いますが、調査中です。携帯にあなたのメールがありました。それまでのメールは消去されています。だから、一番親しかった方かと」



一瞬思考が停止した。悪い夢かと思った。夢ではない。私のワンルームは、殆ど物が無いし、室生寺のカレンダーには何の予定も書いていない。実家の猫の写真が一枚。なんと殺伐とした部屋だろう。

「もし、もし」

相手が言った。やっと、思考が動き始めた。お局が、家に帰って電話をしてみると言っていた。あいつ、名前なんだっけ。

「電話が入ってませんか？」

「Tさん、Sさん、色々入ってますね」

「TさんはKさんの上司です。そちらで家族の方と連絡が取れると思います」

「今頃電話しても大丈夫でしょうか」

意外と頼りない奴だ。

「心配されてましたから」

暫く間があって、「ありがとうございます」と相手が言って電話が切れた。

電話を置いて、水を一杯飲んだ。トイレに行った。物音一つしない。テレビをつけた。音を小さくした。何が映っているのか、何を喋っているのか分からない。

かった。でも、何かに繋がっていたかった。  
ウイスキーをストレートで飲んだ。でも、眠れなかった。膝小僧を抱いてじっとしていた。新聞配達  
のバイクが停まった。ひかりが一筋、畳に洩れた。  
何の音かは分からないけれど、生活の音が聞こえてくる。人が動き出す。一日が始まる。死ぬのは怖い。  
でも、生きているのも怖い。

4

ロッカー・ルームは異様な雰囲気だった。泣いている子もいる。阪神ファンで、仕事が終わると、応援グッズに身を固め、球場に直行するような子だった。Kさんと気があった。一緒に行ったこともあった。Kさんは通勤服のまま、静かに応援していたという。その子を慰めているのは一番古株の山下さんだ。他の人は黙々と着替えていた。後から入ってきた人は異様な雰囲気  
に声を潜める。

「どないしたん？ Kさんが見つかっただん？」

聞かれた子が首を振る。

「見つかったけど、死んではった」

「うそ」

「自殺やて」

机の前に腰掛け。いつものようにコンピュータのスイッチを押した。肩に人の手を感じた。振り向くとお局の顔があつた。

「昨日はごめんね。せや、もう、今日やってん」

お局の目尻に涙が一筋流れた。きれいな涙だった。結局私は泣かなかつた。社員と派遣の間にはこんな差異もあるのだろうか。泣けなかつた自分が悲しかった。

部長から事の経緯が説明された。昨日はS主任とお局に任せきりだった。プライドの高い男だ。そんな仕事は自分がするものではないと思っている。最後の仕切は自分がする。

「九州大分県大分市Kキャンプ場でK君が自殺しました。昨日の午後八時頃です。首つり自殺です。自殺サイトで知り合った男が自殺幫助罪で逮捕されました。過去に同じ事をしていきます。二度目だそうです。その男の通報で分かりました。ご遺体は大分市

で茶毘にふされ、広島の実家で密葬するとのことです。その前に大分大学で司法解剖されます」

事実を並べれば、こういう事なのだ。一昨日、「これサーティワンで買<sup>こ</sup>うてきてん」と言った人が解剖。口の中にアイスクリームの味がよみがえってきた。全員が悲痛な思いで聞いた。重苦しい空気に部屋が包まれた。

「誰かお葬式に」

お局が言った。

「密葬だと言っているでしょ」

部長の声が高くなった。

「でも」

「かえって迷惑ですよ。日時も聞いていないんですよ」

「広島まで旅費も大変ですが」

「お金の問題ちやう」

けちな男がついに切れた。

十月四日（水）

夜。ネット検索をした。検索を繰り返していると、

ヒットした。全国紙の地方欄に載っていた。自殺幫助がニュースなのだろう。集団自殺も自殺ネットもニュースにはならないありふれた出来事になったのだろう。このニュースも全国版では載らなかった。事実だけを伝える素っ気ない文章だった。

三日、大分市、無職、有賀満容疑者（四十四）を自殺ほう助容疑で逮捕。十月二日午後五時ごろ、インターネットの自殺サイトで知り合った大阪市内の男性会社員（三十）が自殺するのを知った上で、ひも様のものを渡し、大分市KのK山キャンプ場で自殺させた疑い。有賀容疑者はキャンプ場まで行ったが自殺を思いとどまった。（大分東署調べ）

M新聞 二〇〇六年十月四日

Kさんの自殺から二週間余が過ぎた。職場は落ち着きを取り戻した。というより、表面上、Kさんはきれいさっぱり忘れ去られた。Kさんの机、ロッカーは父親と妹が整理した。父親は噂通りに快活だった。製薬会社のMR（医薬情報担当者）だから、

職業柄からだろうか。でも、一番大声で喋っているのは不自然だった。大きな会社だとか、すごいコンピュータの数だとか、北朝鮮の核実験だとかいわば雑談だった。離れている私の席からもよく聞こえた。紙袋に必要な物を入れた。いらぬ物の方がはるかに多かった。

「いらぬ物はこちらで処分しますから。なあ、S君」

部長が言った。S主任は返事をしなかった。小さな抵抗。父親は恐縮し、皆さんにと言つて、もみじ饅頭を一箱置いていった。それは何日も部屋の隅に置いてあつた。お局が掃除のおばさんにあげた。

Kさんの机には花が飾られたが、それも枯れ、昨日誰かが捨てた。今日、M君がKさんのコンピュータのキーボードをたたいていた。

最後まで残っていたロッカーの名札を外したのはお局だった。

かくして社員が一人減り、派遣が一人増えた。

空はすっかり秋らしくなった。昼は屋上で、一人

でパンを食べた。ここから、エイと飛び降りたら死ぬのだ。入ってくる電車にエイと飛び込んでも死ぬ。死ぬ場所はいたる所にあるのだ。私は時々落ちる夢を見る。落ちる危険のある場所にいる。不定な場所にいる。落ちたら大変だと思っている。結果、きまって落ちる。落ちていく。その時目を覚ます。夢でよかったと思う。だけど、落ちる私はとても気持ちがいい。すうっと何もかもがなくなる。私が存在しているために私と一緒に存在していたものがみんななくなる。会社も通勤電車も、アパートも、奈良の家も、奈良の家で飼っている猫のミミも。みんななくなる。

また、Kさんのことを思い出した。出来事ではない。彼がいた空間というか、彼が占めていた場所というか。それはパソコンであったり、甲子園の一塁側であったり、休憩室であったり、椅子であったり、芦屋川のバーベキューであったりした。どこにもKさんは永遠に失われている。モノクロのテレビを見るようだった。

「なぜあなたは死んだのですか」

さまざまな場所にそっと問いかけてみた。楽しいことがいっぱいあるように見えても、実際は何もなかったのかも知れない。反対かも知れない。楽しいことの究極に死があったのかもしれない。秋の空をぼうつと眺めながら思った。

たくさんの憶測が飛んだが、苦悩を自殺の原因とするものが殆どだった。「うつ病」という憶測もあった。変人。「変わっていたからなあ」。自殺幫助の男を糾弾する同僚もいた。Kさんはふらふらとついて行ったのだ。あれは殺人だ。どれもがもつともらしいが、やはり推測にすぎないと思う。

社員の精神衛生についての通達も回ってきた。

「悩み相談室」が出来るらしい。専門のカウンセラ―が一人常駐するという。そこでの秘密は守られる。

\*

「Kさんに借りていたCDがあるのです」

昼休みに用意しておいた嘘をS主任に言った。S主任は意味が分からないというような顔をした。こ



の人は本当にタレントのそのまんま東によく似ている。そのまんまだ。クスリと笑った。

「何がおかしいねん」

「いいや、べつに」

手を顔の前で振った。

「CDを妹さんに返そうと思うので」

「ああ、そういうこと。ちょっと待ってね。あった、あった。これが妹さんの名刺」

「コピーしてもええですか」

「個人情報に気をつけてな」

気の小さい主任はつけ加えた。

妹の名前は「久<sup>く</sup>実<sup>み</sup>」。会社は梅田にあった。四時に早引きをした。時給だから遠慮しない。地下鉄で梅田に出かけた。この時間なら座れた。時差出勤、そんな言葉もあった。群れて通勤することもないのに。

会社は直ぐに分かった。でかいビルだ。何をしている会社だろう。アポなしで入った。

「Kさんに面会したいのですが。S社の」

「庶務のKでございますね。S社の方」

さすが世界のS社。名前も言わないのに取り次いでくれた。単なるアホな受付かも知れない。化粧の濃い女だ。つけまつげがめっちゃ長い。目を閉じるときにパタパタと音をたてそうだ。まつげが電話をかける。

「直ぐに降りてくるのでございます。あちらでお待ち下さい」

長椅子を手で示した。拍子抜けするほど簡単だった。十分ほど待つと声をかけられた。彼女は私服に着替えていた。

「お待たせしました」

颯爽としている。ピンクのスーツもよく似合っていた。化粧気は殆どない。素敵だと思った。

「外に出しましょう。ちよつと飲みたいなあ」

何年来の友達のように彼女は言った。並ぶと私より少し背が高かった。スタイルがとても良い。

二人は黙って歩いた。

「私の行きつけのところでいいですか？」

「ええ」

私は頷いた。

ショットバーに入った。

店内に静かなジャズが流れていた。扉を開くと、三階まで吹抜けとなった開放的な空間が現れた。

「簡単な食事もあるのよ」

席に着くと、彼女が言った。

「パスタが美味しいの。村瀬玲さん」

「どうして私の名前を知っているの」

「直感。それとS社の方って聞いて、兄が消さなかったメールの人だと思った。それ以外考えられなかった。あなたのメール以外を消した後も、メールや電話が入ったけれど、お兄ちゃんには何にも出来なかった。死んでいたんだもん」

ボーイが注文を取りに来た。メニューを私に渡そうとする彼女に言った。

「お任せするわ」

「それじゃカニのパスタ。カニは大丈夫？」

「大丈夫というより好物」

「お酒も大丈夫というより好物？」

「そのとおり」

顔を合わせて笑った。一番安いシングルモルトウ

イスキ―を選んだ、それでも七百円。昼食二日分。彼女も同じのと言った。

「ストレートで」

「かしこまりました」

ボーイは懇懃な礼をした。私は少し疲れる場所だと思った。

「お仕事は忙しそうですね」

久実は言った。

「適当にやっています。派遣だから、いつでも辞められる。すると私と同じのが送られてくる」

「そうですね。私も派遣よ。いいかしら」

私が頷くと、彼女は煙草に火をつけた。

「母は会社に迷惑をかけたのじゃないかと心配しています。私は聞かなくても分かりますが」

「それは大丈夫です。仕事は確かで、ミスがなかった。信頼されてました」

「ありがとうございます。母に伝えます。社員の代わりもいますよね」

「誰にでも代わりはあります。でも自分にかわりはありません」

「そうね」

彼女は言った。

「Kさんはみんなに好かれていたから、悪く言う人はいません」

私の言葉に彼女は無反応だった。そんなことは分かっていますという風に。ウイスキーが運ばれてきた。氷を入れて溶けるのを待った。氷の山が崩れる。軽くグラスを振るとカラン、カランと気持ちの良い音を立てた。ここは別世界だと思った。

「私と兄が兄妹だと言ったら、みんなびつくりする。でもこのあたり似てるんですよ」

髪の毛を掻き上げて額を出した。

「ね、ね」

私は笑いながら、ウイスキーを飲んだ。普段シングルモルトなんて飲めない。だから、出来るだけゆつくり飲んだ。

「父の仕事関係で、随分いろんなところで住んだ。北海道から、沖縄まで。兄は随分いじめられたわ。あんな感じだから、いじめやすいのね。特に中学はひどかった」

私は子供の頃のKさんを想像する。

「母も知らない土地で淋しかったんだと思う。その頃母はブランドに凝っていた。子供達はつぎはぎの服を着ていてもね」

久実は私より速いピッチで飲んだ。飲み干すと、  
タイミング良くボーイが現れる。

「同じの」

「かしこまりました」

「あなたちつとも酔わないね」

「酔ったことがない」

「お酒がかわいそう」

ちよっと首をかしげた。もてるだろうなあ、いや、  
案外もてないかも知れない。男にとって少し怖いと、  
思う。

「父はひどいことを言ってた。二人の顔が入れ替わ  
っていたら大変だったなんて。兄は、そうや、そら  
大変やって。アホや。私の顔を心配してやんの」

少しろれつが回らない。それがとても可愛い。彼  
女はグラスを回した。ウイスキーの琥珀色がグラス  
に美しく流れた。

「私と兄はいつも一緒だった。遊ぶのも喧嘩するの  
もいつも兄とだった。短期間しかない土地では友  
達はできなかつた。「新しいお友達です」と、担任  
の先生に紹介されて、転校するときには、空席が一つ  
増えるだけだった。きっと私がいなくなったのを誰  
も気づかなかつたと思う。兄は私がいじめられた時、  
本当に怒つた。あんなに怒つた兄を見たのはそれが  
最初で最後だった。私は兄を嫌だと思つたことが一  
回もない。本当よ。大阪に来てから一度も会わな  
かつたけれど、いつも私の中にいた」

久実はお兄ちゃんの目をやつた。夜景の中に彼女の横  
顔が浮かんでいた。

「兄が死んだ時、私の体の半分がなくなつたような  
気がした」

彼女が、小さく言つた。

「私はお兄ちゃんのことなら何でも知つている。一  
人でしていたのも知つている。ぶつというんことをし  
て流し忘れたのも知つている」

窓の中の自分に語りかけるように言つた。そして、  
笑つた。とてもチャームングな、しかし、今まで出

会ったことのない淋しい笑みだった。

「私は時々私って何なんだろうと考えることがあるの。

村瀬さんはない？ 私が生きているのはとても不思議。私はアメンバーみたい」

少し考えて、「あるよ」と小さくこたえた。屋上で考えていた。私って何なんだろう。ほかのところでも考えたことがある。それは私を不安にさせた。他人のこのようにわかっているようでわからない説明できないものを含んでいる。私が生きているということとはとても不思議なことなんだ。アメンバーみたいに。ただ日常の雑事にまぎれると跡形もなく消えてしまう。久実の唐突な言葉はしっかりと私に届いた。

ピアノの演奏が始まった。小さな音を紡ぎ出し、少しずつ、少しずつ大きくなった。軽やかなメロディになり、音は高く、早くなった。ピアノ演奏を見ている視線を戻すと、久実は眠っていた。あどけない顔が悲しい旅のささやかな休息のようだった。

私はボーイに視線で合図をした。



「ごちそうさま。でも、もう会わないね私たち」

彼女が言った。私は頷いた。

「ありがとう」

私は言った。

「ありがとう。さようなら」

久実は足もとをふらつかせながら、後ろ向きに大きく手を振りネオンの中に消えていった。

5

急に家に帰りたくなった。私には二才離れた妹がいる。奈良で教員をしている。私は土日は帰るという約束でアパートを借りたが、いつの間にかなんのかの理由をつけて帰らなくなった。姉にひとり暮らしを許せば、妹を許さないわけにはいかない。

結婚して家を出るように母は希望したが、その気がなさそうな娘達に母は諦めた。

『今週の金曜日家に帰る。お主も帰らぬか』とメールを送った。

『相変わらず暇そうやね。帰ってもええよ』

随分経ってから返事が来た。

難波から特急に乗った。五百円プラスだ。たまに帰るからいいだろう。ホームはサラリーマンで溢れていた。すし詰め of 電車に乗る気がしない。父は定年までこの距離を三十七年間通った。往復三時間の通勤時間。私が通う会社よりも遠い。尊敬する。携帯電話で計算してみた。私が経済的に不自由なく大人になれたのは、二万六千六百四十時間の通勤時間、つまり三年近く車内にいた父のおかげだ。定年後は持病の糖尿病に取り組み、インシュリンを打ちながらも、正常値を維持している。そのうち高血圧になり、三種類のクスリを飲んでいる。血糖測定器と血圧計が友達になった。現役中は、苛ちだったけれど、この頃は随分穏やかになった。

「昼ご飯はわしが作ってんねん」と、帰る度に言う。「メニューも増えたで。焼きそば、お好み焼き、焼きめし、ラーメン、うどん、冷やしうどん、ソーメン、そば、おにぎり、オムライス、親子どんぶり、スパゲティ、サンドイッチ、チキンバーガー、これは買うてくるんやけど」

塩分を控えている。甘いものは全く口にしなくなつた。ごはんの重さを量り、きっちり炭水化物の量を計算してやっているから立派だ。

母は元気だ。一年に一、二度海外旅行に飛び回っている。父は閉所恐怖症で、飛行機嫌い。だから、ついて行かない。

いいことばかりではなかった家が無性に懐かしい。Kさんの死を話せるのは家しかなかった。私はそれほど強くない。

ドアホンを押す前に母が出てくる気配がした。

「ただいま」

「お帰り」

居間に入ると、妹はもう来ていた。

「お姉ちゃんお帰り」

父は、新聞から目を離し、「おう」とだけ言った。ご馳走が準備されていた。

団らんの中でKさんの話をした。

「考えたこともないし。人生が楽しいちゅうタイプや思ってたのに」

「自殺サイトか」と父。

「分からへんね、若いのに」と母。

「いい人やったんよ」と私。

「変なもんがはやるなあ、小学校でも問題になってるし」

妹がリンゴを嚙りながら言った。

「贅沢やな」

父がぼつりと言った。父の言葉は食卓の上で行き場を失い、静止した。父にも自殺を考えたことがあったのかなあと思った。父がいなければ、私もいない。少なくとも、今の私はいない。

Kさんの話はそれで終わった。話せば、心が少し軽くなった。

「正社員にはなれへんのか」

いつものように父が言った。

「今のままやったら、絶対になれへん。そんな人おらへんもん」

「そうか」と言って、父は糖質ゼロのビールを飲んだ。

ミミが膝にのぼってきた。ミミの背中をなでなが

ら、——ここにはまだ私の居場所がある——と思っ  
た。

妹は風呂に入り、私は母と並んで食器を洗った。  
久しぶりに二階で、妹と枕を並べた。この場所で  
いろんな事があった。諍いも、嫉みも。取っ組み合  
いも。世界中で妹が一番嫌いだと思ったことも。

「ええ人はいてへんの」

「いてへん」

「姉ちゃんに氣い遣わんと、さっさと行ったらええ  
さかい」

「残念ながらいてへん。教師はださいわ。ええ男は  
売れてるし」

「ほんまやなあ。せやけど、うちは結婚願望はない  
し」

「うちはある。そのKさんちゆう人は」

「そんな人とちやう」

簡単に言った。

「うちが死んだらどうする」

私は突然言った。

「そんなこと考えたことないわ」

妹はそう言って寝返りを打った。私は電気スタンの明かりを消した。

次の日、朝食後、

「久しぶりに文殊さんへ行こか」

と、私が妹を誘った。

「ええなあ。何年ぶりやろ」

「ほん近くやのにね」

「それだけ、あんたらが家に帰ってこうへんちゆうことや」

台所から、母が言った。

「お母さんも行こ」

妹が言った。

「ええわ、毎日ウオーキングで通ってるさかい」

家の近くに、安倍文殊院がある。子供の頃は、境内でよく遊んだ。今は、コスモスが咲き乱れているだろう。姉妹は肩を並べて歩いた。不思議なもんだ。似ているところと、真<sup>ま</sup>逆<sup>ぎやく</sup>の所がある。ある時は敵で、ある時は理解者。二人姉妹は特にそうだ。

山門をくぐる。春は山門から見る桜が美しい。穏やかな秋の日、燈籠が並んだ細い石畳を歩く。木漏

れ日がきらきら光る。

人が多い。コスモスの迷路で子供達が歓声を上げている。ここには入るまい、きっと出られない。妹が行ってくるわと言って直ぐ出てきた。いつもは閉まっている浮御堂が今日はあいている。拝観料がいるからやめた。

「本堂で文殊さん見て泣いたん覚えてる？」

「覚えてへん」

「せやろなあ、うちも六つぐらいやったし」

本堂には、快慶作高さ七メートルの文殊菩薩像がある。昔、家族で行った。台座が獅子で、妹は獅子の顔を見て怖がって泣き出したのだ。

家に寄らずに文殊さんに来たことがある。理由は忘れた。でもたいした理由はなかったと思う。その時は休みを取った。誰もいない境内をぶらつき、白山堂への石段をあがり、視界の広がった展望台で大和三山（はっきりとは分からなかった）や二上山を眺め、賽銭箱に十円ずつ入れて手を合わせた。

拝観料を払い、本堂で、お茶とお菓子をいただき、袴姿の多分十代の若い女性から「説明をお聞きにな

りますか」と言われて、「はい」と返事をしてしま  
い、文殊院の説明を聞いた。歌うような調子だった。  
その後は気のすむまで文殊菩薩像を見ていた。童子  
像が合掌し、菩薩の方を斜め右に振り返っている。  
とても、かわいい。一二二〇年、快慶という人がい  
た。仏像は永遠の時を刻んでいる。私自身が時の中  
に溶けていく。父母がセックスをして私が生まれた。  
父母もそうして生まれてきた。時をさかるのぼると、  
どこかに私はいる。一二二〇年にも私はいた。私は  
いつから始まったのだろう。もし結婚をし、子供を  
生むことになったら、私はどこまで続いていくのだ  
ろう。

「本堂に入ってみよか」

「ええけど」

「今度は泣かへんな」

「今泣いたらアホやん」

二才の年の差は微妙だ。私はよく父に叩かれたが、  
妹は滅多に叩かれなかった。後で、それだけ大事に  
されなかったと妹は言った。真剣にお父さんは私  
を叱らなかつた。妹は私より頭がよかつた。私は



短大だけど、妹は、国立の教育大学に受かった。

「よかったね」と喜んだけれど内心はそうじゃなかった。お祝いの食卓を途中でたった。

「明日、ゼミで発表するねん」

嘘について二階に上がった。

二階で、私は、泣いた。妹の不幸を願っていた自分が悲しかった。

「頭は私の方がいいかもしれないけど、その分お姉さんは美人だよ」

いつのことだったか忘れたけれど、妹は言った。

団体客の後ろを歩いた。仏像もゆっくり見られなかった。突然、Kさんの声が聞こえた気がした。

「四万人の観衆の中でも僕は一人だった」

振り返ったが誰もいなかった。

6

十一月三、四、五の三連休に私は大分市に行くことにした。飛行機で一時間の距離だ。飛行機に乗るのは何年ぶりだろう。もっとも嫌いな乗り物だった。

事故も怖いけれど、巨大な鉄の固まりが飛ぶこと自体が怖い。帰りは電車にしようと思つた飛行機に乗つた後、考えた。Kさんも飛行機に乗つた。帰らない旅の始まりだった。

私は何でここまで来たのだろう。自分の行動に理屈を考え出したらきりが無い。私達は理屈のために生きているのではない。飛行機がぐんぐん高度を上げる。私の住んでいる街が段々小さくなる。毎日同じ回路を私はぐるぐる回っていた。その回路から抜け出す。それが旅の目的であつても良いのではないか。私はそう考えることにした。

三連休なのに空席が目立つ。いつの間にか窓の下は雲だけになっていた。ビールを一本もらつて、目を閉じた。シートベルトを促すアナウンスで目が覚めた。

海がどんどん迫ってくる。突然滑走路が現れる。ガリガリと派手な音を立てて、滑走し、突然止まつた。

地方都市の空港は小さく、淋しい佇まいだった。空港ビルも人はあまり多くない。二人は空港で初め

て出会った。地方紙を取り寄せた同僚が言っていた。サインは何だったのだろう。帽子ではない。Kさんの頭に合う帽子はない。阪神のユニホーム。それもない。Kさんは意外と照れ屋なのだ。有賀に会ったら聞いてみよう。

昨日ネットで辿った道に行く。大分空港から大分駅まで、バスで一時間かかる。

まず中心街にあるコンパルホールを目指す。ネットで調べた。九州は温かいイメージなのに少し寒い。

中庭は吹き抜けになっていて空が望める。エントランスに入ると、私は広い空間に迷い込んだ小さな虫のようだ。

大分市民図書館はコンパルホールの一階にある。図書館なんて何年ぶりだろう。親と一緒に行った記憶しかない。カウンターで新聞閲覧について聞く。

今年の十月四日の地方紙を見たいと言った。

「大分合同新聞でいいですね。書庫にありますから、少しお待ち下さい」

係の女性は笑みを浮かべながら言った。十分ほどすると、新聞を持って帰ってきた。

「バインダーから外すのに時間がかかって」

自分のドジを可愛く笑った。私は恐縮した。知らない土地で受ける好意は素直に嬉しい。

かなり大きく取り上げられていた。二面コピーして、新聞を返した。

「ありがとう、助かったわ」

係の女性は、微笑んで小さく頭を下げた。

コンパルホールを出て喫茶店に入った。私は一人で喫茶店に入ることはない。人ともあまり入らない。小ぎれいな店内には、静かな音楽が流れていた。人もまばらだ。窓際の席に腰を下ろした。

記事は概ね全国版と同じだが、一面と、三面に渡っている。自殺幫助の男、有賀の住所も載っている。お腹が空いたので、サンドイッチとコーヒーを頼んだ。署名入りで自殺サイトへの警鐘もある。この地方ではかなり大きな事件だ。食事を済ませたら、新聞社に行ってみよう。携帯電話で新聞社の場所を聞く。ここからあまり離れていない。歩いても行けるが面倒だし多分迷う。タクシーにしよう。友人は軽いから、恋人にしよう。「恋人……」。なぜかおか

しかった。私は今まで恋人はいない。Kさんも多分そうだろう。いない者同士が恋人。Kさんがあの日に会いに来なかったら、この旅はなかっただろう。そして、もう、忘れ去っていただろう。だが、本当にそうだろうか。分からない。

窓から大分市の空を眺めた。快晴の空には雲一つなかった。私は今、異境にいるような気になった。誰も私を知らない土地にいる。私も誰も知らない土地にいる。急に不安になった。

大通りで空車を見つけた。

乗り込むと年配の運転手が言った。

「どこへいくのかえ」

「大分合同新聞社」

「あんいたほうがはやいや」

歩いた方が速いということだろう。黙っていると走り出した。不意打ちの方言に私は急に不安になった。誰も知人のいない世界に私はいるのだ。帰ろうかと思った。今なら、引き返せる。「大分駅と言えばいいのだ」。その瞬間、タクシーが止まった。

「つきたで」

七十才位のの運転手が言った。大分合同新聞社のビルは想像していたよりも新しく巨大だった。エンランスに入り、受付に向かう。

「社会部のNさんにお会いしたいのですが」

「アポイントメントはお取りですか」

「いいえ」

「ご用件は」

「十月二日の自殺幫助事件についてお伺いしたいことがあります。大阪から来ました」

「しばらくお待ち下さい」

受付嬢は電話を取った。声を潜めたので私はカウンターから離れて電話が終わるのを待った。広いロビーに記者と思われる人がせかせかと歩いている。面会は断らないだろう。時間がなければ待つつもりだ。まだ休みは二日ある。

受付嬢が電話を置いた。

「お会いするそうです。会議がありますので、短い時間ならと言っていました」

場所の説明を聞いて、立ち入り許可書をもらった。

「終わりましたら、お返し下さい」

エレベーターで九階に上がる。長い廊下を歩く。社会部の矢印を見てほっとした。エレベーターまで戻れるか心配になる。私は方向音痴でもある。

社会部と書かれたドアを押す。一気に騒がしい部屋に立っていた。机の上は雑然としていて、喧嘩腰で喋っている男もいる。

一番奥のデスクの男が私を見た。あの人がNさんだろう。五十過ぎの白髪だった。立ち上がり私に近づいてきた。

「村瀬さんですか」

私は頷いた。

「ここは喧しいでしょう。会議室に行きましょう」  
また、廊下に行く。帰りは絶対に迷う。パンくずを落としていく童話があったと思う。ティッシュューを小さく丸めて落とそうかと思っっているうちに着いた。Nさんは「空き」という札をひっくり返して、会議中にした。テーブルに向かい合って腰掛けた。

「遠いところをどうも。Kさんとは？」

「同僚です」

恋人という言葉は出なかった。だが、Nさんは多

分そう感じていたと思う。

「あの日のKさんを辿ってみたくて来ました」

「それじゃ、有賀にも会いますか」

「お会いしたいと思います」

「トラブルになってもねえ」

「話を聞くだけです。約束します」

Nさんは少し考えていた。

「まあ、いいでしょう。小さな町だから、どつちみちあなたは有賀に辿り着くでしょう。それに彼は危険ではないと思います」

「今はどうしていますか？」

「家にいますよ。保釈中だから、自由に動けない。

裁判は来年になるでしょう」

「保釈？」

「あのあたりの名士ですよ。それも一人息子。収監もされなかった。てんかんの持病があるという理由でね。診断書が出たそうですが、医者知り合いもありますしねえ。よく分かりますよ」

Nさんは人差し指でテーブルを叩いた。コツ、コツ。小気味のよい音を立てたコツ、コツ、コツ。



「人が死ぬのを見て喜ぶ。異常ですよ。それも二度目です。また、やりますよ。死ぬまでやる」

Nさんは小型の冷蔵庫から、お茶のボトルを取り出して、紙コップについだ。

「お構いなく」

「自分も飲みますから」

Nさんは背を向けたまま言った。

「自殺サイトがあるからダメなんです。規制しなければ。一人で死ぬのが怖いから仲間を求め。心中はある意味で分かるけれど。死ぬのを一緒にというのは分からんですよ。それも見知らぬものですが。人と人は実際に出会ってから関係が始まるんですよ。ネットで何がわかるんですか」

Nさんは九州男児なのだ。声大きい。

「九月の半ば、東京でオフ会があったそうです」

「オフ会？」

「ネット仲間が実際に会うのですよ。それにKさんは参加していた」

神宮球場に行くと言っていた。ヤクルト・広島戦を見に行った。その時オフ会があったのだ。

「有賀さんも参加していたのですか」

「有賀は参加していません。そんなところに出て行く男ではない。年もいつてますしね」

Nさんは音を立てて、お茶を啜った。

「自殺サイトのオフ会って……」

「普通みたいですよ。自己紹介して。結構楽しそうです」

「同じ趣味の人が集まるんですか？」

「まあ、そうですね。あの死に方より、こっちの方がいいとか。全然暗くないそうですよ。仲間内ですから」

「みんなKさんみたいに普通の人なんだ」

「普通じゃない人なんていないですよ。だけど間違っている。生きててなんぼですよ人間は」

Nさんは力をこめて言った。少しの沈黙があつた。

話が横道に逸れた。Nさんは修正した。

「逮捕の理由は、ロープを用意した。細いロープと太いロープ。どっちにすると聞いたたら、K君は太いロープを選んだ。有賀はどうしても生きているうちにやらなければならぬ事がある。三十分ほど待つ

てくれと言った。それから、三時間、有賀は物陰に隠れて、K君が死ぬのを待っていた。K君はベンチに腰を下ろして有賀を待っていた。だが、有賀は帰ってこなかった。K君は木にロープをかけて、ベンチからぶら下がった」

「有賀さんは止めなかった」

「人が死ぬのを見る。それが彼の目的だから。当然止めませんよ。何を考えているんでしょうね。そんなものを見ても何も楽しくない。私らの世代にはさっぱり分からない」

私にも分からない。自殺なら分かる。考えたことがないでもない。人が死ぬのを見て何が嬉しいのだろう。Kさんは三時間待った。三時間。Kさんは何を考えていたのだろう。例のおっとりとした感じでベンチに腰掛けていたのだろうか。夕闇は深くなる。その時、私のメールが入った。

「有賀に会って一番驚いたのは、彼が全く普通の青年だったということ。きつちりと敬語も喋れる。こちらの気持ちも分かる。理想的な青年だった。私の前ではという条件付きですが。一応父親の会社の

役員と言うことになっていますが、大学を卒業後は家でぶらぶらしています。結婚歴はなし。A型。前回の相手は二十九才の男性です。今回と同じで、ネットでも知り合った。懲役二年執行猶予三年です」

「何年前ですか」

「三年ちよっと経っているんですよ。上手い具合に。これが私が知っている全てです」

Nさんは静かに言った。そして、Nさんは私の前に名刺を置いた。

「タクシーの運転手です。彼が二人を空港から、有賀の家まで送った。私も取材しましたから」

Nさんの携帯が鳴った。

「分かっているよ。先に始めておいて」

語気が激しかった。

「もう少し有賀を追いたかったんですが。学生時代とか、家族関係とかね。上から止めろと言われた。止めろと言われたら仕方がないですよ。サラリーマンですからね。でも、何でそんなことをするんですかねえ。自殺なんて。生きててなんぼじゃないですか」

また、同じことを言った。

「私はKさんは人生を楽しく生きている人だと思っ  
ていました。趣味も色々あったし。私の人生の中  
もつとも意外なことだった」

「そうですか」

「ここに来た理由は、自殺する前の日に私に会い  
来てくれたからです。誰にでもない、私にです。恋  
人じゃない私にです」

「好きだったんですよ、あなたが」

Nさんは簡単に言い切った。

「私は、人を好きになったことがありません。有賀  
と同じですよ、多分。好きという感情が分からな  
い」

「だけど、今、ここにいないじゃないですか」

また、携帯電話が鳴った。

「そろそろ、行かないと。二階だから、一緒に行き  
ましょう」

かくして、私は迷路から脱出した。

\*

ホームセンターで護身用に小さなナイフを買った。

有賀はやはり怖い。菊の花も買った。何か混ぜようと思ったが、結局菊の花だけにした。一色が好きだ。

タクシー会社に連絡をする。近くにいるから、直ぐに行くという返事だ。また、年配の運転手だった。

「どげんしちわいを」

分からないふりをした。

「前に乗ってもらったかなあ」

「いいえ初めてです」

「どこへ」

「有賀さんの家へ」

「有賀？ ああ、有賀さんねえ」

「一月ほど前、自殺をした人を乗せたでしょう」

「乗せたよ」

「その人の友人です」

運転手は黙った。長い間黙っていた。

「二人とも上機嫌だったなあ。野球の話で盛り上がっていた。ピクニックに行くような感じだったなあ。

死に行くとは思いませんでした」

車はいつの間にか郊外を走っていた。刈り取られた田んぼが続く。すすき。コスモス。すっかり秋だ。運転はかなり荒い。Kさんはこの空間で、野球の話をしていた。有賀は相槌をうつこともなく黙って聞いていた。

「着いたよ」

運転手が言った。

大きな門構の家だった。飛石が奥へと続いている。

ドアホンを押した。

「どなた様ですか」

年配の女性の声が返ってきた。

「村瀬と申します。亡くなったKさんの事でお伺いしたいことがあります」

マイクの向こうで躊躇する様子が伝わってきた。

「大阪から来ました。有賀<sup>ありがみつる</sup>満さんにお会いしたいのですが」

「裁判前ですのでちよつと」

「ご迷惑はおかけしません。満さんに聞いてもらえないでしょうか」

「Kさんとは？」

「友人です」

「しばらくお待ち下さい」

飛石の向こうに長身の男が姿を見せた。ゆっくりとこちらに向かってくる。背は高い。痩せている。金縁の眼鏡をかけている。近づいてくると、目がすずしい。美男子だ。向こうも私を見て驚いている。彼は軽く頭を下げた。

「有賀です。どうも」

「村瀬です。お忙しいところをすみません」

「忙しくないですよ」

明るく笑った。

「僕の部屋でお話しましょう」

部屋というより家だった。

「日差しもよいし。ここがよいですね」

縁側に並んで腰掛けた。女がお茶を運んできた。

「Kキャンプ場にあなたと一緒に行きたいのです」

彼は黙ってお茶を飲んだ。前には池がある。まだ早い。紅葉の木が植わっている。手入れの行き届いた落ち着いた庭だ。



「いいですよ。その前に少し話していいですか」

彼は言った。私は頷いた。

「僕はロープを用意した。彼が死ぬのを見ていた。

それが罪ですか？」

「一緒に死ぬと嘘をついた」

「死ぬのが怖くなって逃げたんですよ」

「助けなかった」

「助けなかったって」

彼は小さく笑った。

「彼が望んでいたことですよ。でも、あなたみたいな人がいるのにどうして死んだのでしょうか。一生片思いでもよかったのに」

また、長い指を曲げてお茶を飲んだ。とても優雅に。

「自殺サイトに一緒に死んでくれる人、手を挙げて書いて書いたんですよ。足も挙げるよって言う人がいた。チンボコも挙げるよって言うのもいた。こんな人は多分嘘つきだ。彼は手を挙げますだったから」

「前にも一度同じ事を」

「うん。全く同じ」

「なぜ」

「僕には人を殺せない。そんな勇氣はない」

「模擬的に殺すのですか」

「いいや、彼らは自分で死んだ。同時に生きること  
も出来た。僕は傍観者。何もしない。彼らの行動を  
見ていただけ」

「性的に興奮するのですか」

「そんなレベルじゃないですよ。人間が自分で死ぬ  
のはそんなのじゃない。自分で自分を殺す。自分の  
世界を消す。絶対にそんなレベルじゃない。それに  
彼は僕が死ぬのを望んでいたか分からない」

少しの沈黙があつた。気持ちの細波を収めるよう  
に彼は言った。

「僕は不能ですよ。肉体的にも、精神的にも」

彼は楽しそうに笑つた。

「変態！」

私は叫んだ。彼の目に一瞬殺意が浮かんだ。私は  
ナイフを握りしめた。冷静をよそおうように彼は上  
唇をなめた。

「女は醜い。きれいななんて思ったことがない。肉の

かたまり。でも、君は違うなあ。少し」

不意に家にいる猫のミミを思い出した。彼の膝の上  
上にミミがいたらすべてが変わっていたような気が  
した。

「目の前で生と死が交叉している。僕は傍観者であ  
り続ける。そんな状態に興奮する。それが悪いので  
すか。僕の個人的な趣味だ」

「趣味……。あなたこそ死ぬべきだった」

彼がN記者の前でつけていた正常という皮膚を一  
枚、私は剥いだ。私は有賀を知りたいために来たの  
ではなかった。興味もなかった。Kさんの失われた  
言葉を求めてやってきたのだ。だが、ここにいる男  
は何者なのだろう。理解出来ない人間がここにいた。  
「分からない。もういいから事実だけを話して下さい  
い」

私は言った。

「私はあなたに会いに来たのではない」

ふっと有賀に嫌悪の表情が浮かんだがすぐに元に  
戻った。

「煙草、いいですか」

私は頷いた。

「大分空港で初めて会った」

「サインは」

「当然サインはV。僕の提案です。男一人で、キョロキョロしている。そんな人は多くない。僕は彼にVサインを送った。一人目で当たりだった」

年配の女の人が不意に姿を見せた。

「満君、お友達」

「こっちにくるな」

女の人の足が止まった。

「どげんしちそげなにおこっちよんの」

「だいじなはなしをしちよんから」

女の人のはたじろいて、私に軽く会釈をしてきびすを返した。

「お母さんですか」

彼はそれには答えなかった。

「まじめな人だと思った。お土産に栗おこしをもらいましたよ。野球の話をしていたなあ。ヤフードームにもよく行くって言ってた。それ以外何を言っていたんだらう。覚えていない。喋らなかったかも知

れない。でも、楽しそうだった。一緒に死ぬのがそんなに楽しいのだろうか。終始ニコニコしていた」  
彼は目を軽く閉じ、一月前を思い出しているようだった。

「仕事の話も世間話もしなかった。彼は野球の話を楽しそうにぼそぼそと話し、僕はそれを聞いていた。お互い名前も知らなかった。僕は童貞ですと言ってましたよ。どうでもいいことだけど」

猫が塀の上を歩いている。鳥が鳴いている。静謐な午後の時間。

「タクシーに乗って、一緒にここに来て、遺書を書いた。こんなのでいいですかって僕に見せましたよ。僕は見なかった。僕のを見ますかといったら、いいですって。それで遺書を置いてKキャンプ場に行っ  
た」

そこで言葉を切った。暫く何かを考えていた。澄んだ目で池の方を眺めていた。

「いや、その前にごはんを食べた。何か食べますかと聞いたら、カレーライスが食べたいって。どれがいいですかと聞いたら、ボンカレーを指さした。サ

トウのごはんをレンジして、ボンカレーをかけて作ってあげた。料理と言うほどのものではなかったけれど。氷水も作ってあげた。カレーライスを美味しく食べて、氷水を一気に飲んだ。おかわりしませんでした。それから、トイレを貸してくれと言ったなあ。長い時間だったから、大の方だと思う。それで」

「遺書に」

私は言葉を挟んだ。有賀は言葉を止めて私を見た。少し不思議そうな顔をした。

「遺書……。持ってきてみましょうか、コピーを取ったから」

「いいえ、いいです。妹さんのことを書いてありましたか」

「なかった。あなたのこともなかった。彼は一番書きたかったことを書かなかった。一番残したかったことを残さなかった。仕事とか、会社とか、つまりないことばかりが書いてあった」

短い沈黙があった。

「あなたの遺書が見たい」

有賀は初めて顔色を変えた。

「何のために」

「どんな嘘が書いてあるのか知りたい」

私ははっきりと言った。私は繰り返した。

「どんな嘘が書いてあるのか知りたい」

有賀は新しい煙草に火をつけた。まずそうに煙を吐き出した。随分長い間二人は黙っていた。深い闇のような沈黙だった。

「捨てましたよ。とつくに」

彼は立ち上がった。

「それじゃ、そろそろ行きましようか」

と彼は言った。その後脈絡のないことを言った。

「僕はかすかに車には興味がある」

私はトヨタセンチュリーの後部座席に乗り込んだ。

「九州は初めてですか」

「修学旅行に来たことがあります」

「高校のですか」

「ええ」

「僕は九州以外に出たことはありません。仕事をし

たこともない」

トヨタセンチュリーは静かに動き出した。

母親らしい人が、不安そうに車を見送っていた。

「Kキャンプ場は七月と八月しかキャンプを受け付けないから、それ以外は人も少なく静かです。下の公園はウォーキングの人や散歩の人が多いけれど、展望台まで行けば、滅多に人はいない。でも、キャンプっていやだなあ。あんなの何が楽しいんだろう」

彼はゆっくりとアクセルを踏んだ。自動車に自分を同化させるような、車が自分の意志で動いているような安全運転だった。

まだ、日は落ちていない。駐車場に車を止めて、歩いた。何もないところだと思った。淋しい場所だった。荒野だ。

「冬は雪が積もります。九州は暑いなんてとんでもない」

山道を歩いた。やがて、頂上に着いた。薄闇の中に、町が広がっていた。町が一望できた。こんな所  
に場違いなブランコがあった。それと、石のベンチ。



その後ろに、名前の知らない木があった。Kさんは木に紐をかけ、ベンチから飛んだ。常夜灯が一本。小さな展望台。

「彼はこのベンチに腰掛けていた」

私はベンチに腰掛けた。

「今はあの時より日の入りが三十分ほど早いから、まだ、日が暮れてなかった」

辺りは暗くなり、常夜灯に明かりが入った。

「何も話さなかった。話す事もなかった。僕は煙草も吸わなかった」

「隠れていても、匂いはする」

「そう。煙草は持っていなかった」

有賀は笑った。冷たい笑いだった。

「大切な事を一つ忘れていた。三十分ほど待ってくれますかと聞いた。彼はいいですよどうぞと気持ちよく言った。大切な事の内容も聞かなかった。僕も言わなかった」

少し寒い。つるべ落としに日が暮れる。

「三十分ほどして、日が暮れるのを待って僕は戻った。彼は同じ場所に同じ姿勢で腰掛けていた」

彼は植え込みの方に歩いた。

「僕はここから見ていた」

声のする方向を見たが、彼の姿はなかった。

「彼は一時間ほどじいっとしていた。時々虫除けスプレーを噴霧しながら、僕は彼にもらった粟おこしを食べていた。音をたてないように気をつけながら。お腹が空いていたんでね。秋の虫が喧しいほどに鳴っていた。今はみんな死んじまったけど」

Kさんは何を考えていたのだろう。

「ブランコに乗って暫く揺れていた。ルビーの指輪をロズさんでいたなあ。上手い。誰にでも一つぐらい取り柄があるもんだ」

目をこらすと、常夜灯の加減で有賀の姿が薄い影のように見えた。有賀は正面の芝生に腰を下ろしている。Kさんは知っていた。

「僕は隠れていない。彼が見なかったのだ僕を。僕が見えなかった」

「私にはあなたが見える」

有賀は私の言葉に反応しなかった。だから、もう一度言った。

「私にはあなたが見えるわ」

「見えていたのかも知れない」

十メートル程隔てて二人は対面していた。

「だけど、あいつは見えていないんだよ他人が」

「見ていた、あなたを」

私は叫んだ。私はナイフを握りしめた。自分を守るためか、有賀を刺すためか分からなかった。

彼は笑った。

「そうかも知れない。でも、確かめようがない」

「人殺し！」

私は叫んだ。

有賀に人の血が流れた。私に走り寄った。私のナイフが、腕をかすった。彼はひるまずに、私の首に手をかけた。彼と私が人間として繋がった。はっと気づいたように、有賀は私から離れた。

「わいの胸を刺せ」

有賀が左胸を叩いた。

「わいの胸を刺せ。今なら死ぬる。死なせてくれ。頼む」

私はナイフを捨てた。恐怖心はなくなっていた。

この男に抱かれてもいいときえ思った。

有賀から人間の血が引いていった。無機質な男がそこに立っていた。彼は生きながら死んでいる。そんな気がした。有賀の腕から血がにじんでいた。彼は気にならないようだ。痛覚もないのか。

「人殺し！」

私はもう一度言った。だが、有賀に人間の血は戻ってこなかった。

「かわいそうな人」

私は言った。有賀はさびしそうに笑った。

彼はまっすぐに私を見つめた。

「三時間たって、携帯電話を操作し始めた。操作はすごく速い。君のメールだけ残して全て消した。彼は動いた。ベンチに乗って、ロープを木にかけた。僕が見ていたのはそこまですよ。醜い物は見たくない。結局、後で聞くまでは名前も、職業も、年齢も知らなかった」

彼は静かに言った。

「人が死ぬのにそんなに理由がないんですよ。ちょっと旅に出るみたいに人は死ぬ。そして二度と帰っ

てこない。残されたものが伝説を作る。でも、旅に  
でられない人間もいる」

言いようのない怒りがこみ上げてきた。やがてそ  
れは虚無と絶望に変わった。

菊の花を木の根っこに置いた。太い幹を見上げた。  
彼は頷いた。二人は暫く黙っていた。そして、手を  
合わせる私に有賀は言った。

「花は美しい。人間は嫌だ」

「また同じ事をしますか」と、私は聞いた。彼は答  
えなかった。とても深い沈黙だった。

トヨタセンチューリーは静かに動き出した。

大分駅まで送ってくれた。教科書通りの安全運転  
だった。一言も言葉を交わさなかった。車を降り  
た時も、涼しい目でじっと前を見ていた。彼は自分  
に正直なのかも知れない。そんなことをと思った。  
憎まなければならぬのに。不思議に憎悪はなかつ  
た。体についた塵を払うように私は自分の狂気を振  
り払った。

小倉で新幹線に乗り換えた。ぎりぎり間に合った。アパルトに着くのは明日になるだろう。自動販売機で買ったミネラルウォーターを飲んだ。水は一瞬に吸収された。メールを打った。

『今から帰ります』

宛名は空欄のまま、携帯電話をたたんだ。長い間、車窓に浮かんだ私の顔を眺めていた。電車は広島を通った。六十一年前、原爆が落ちた町が夜のしじまの中に沈んでいた。

広島の人々も次の瞬間に自分が死ぬとは思っていなかった。

二〇一〇年八月一二日 了

フーテン

一 それは夢から始まった

目覚めた時、夢だったのか現実だったのか判断できなことが田代順平にはある。六十才を過ぎてから頻度が増えた気がする。深酒のせいかもしれないが、しらふで寝た時にも起こることがある。妻に確かめる事さえあるのだ。

「夜中に、誰か来た？」

「誰も来ないよ」

「そうか、夢だったのか」

「夜中に電話が鳴った？」

「さあ、私は気がつかなかった」

やはり夢だったのか。

夢から出られないこともある。必死になって出ようとして、やっと現実に戻る。幼い頃からあったことだが、この頃頻度が増えた気がする。気になって、順平は思い切って心療内科へ行った。

「そんなの聞いたことがないなあ」

普段着の若い医者がカラツと言った。

「睡眠薬、飲んでる？」

「飲んでいません」

「そっか、それじゃ飲んでみる？」

「飲んでいる」と言えば、多分、「薬の副作用かな

あ。止めてみる？」と言うつもりだ。

一度行つたきりやめた。

眠りも「夢」も不思議だ。人は飽きもせず眠る。

そして、夢を見る。睡眠は脳と体を休ませるのだという。犬や猫も眠るらしい。みみずやバッタも眠るのだろうか？ 植物はどんな夢を見るのだろうか？

\*

妻が「私、強姦されちゃった」と言った。堅い漬け物を入れ歯でかじりながら、順平は「フユ」と奇妙な音を立てた。

「三十一階の平山さん」

妻はあっけらかんと続けた。

「知らない」

「時々お庭で散歩しているでしょ。倒れるんじゃない



いかって心配するような歩き方で」

「ああ、あれか。尺取り虫みたいな人」

「尺取り虫？ そんなの知らないけれど多分その人」

「突然、入ってきて、入れられちゃった」

四十年以上も一緒に住んできたのに……。十年以上没交接ではあるが、性に関しては自分だけだと思っていた。喪失感が胸に押し寄せてきて、順平は無性に悲しく、涙腺が緩んだ。その時に目が覚めた。

枕元の時計を見ると、午前三時。四畳半の書斎はしんとしている。夢でよかった。順平はしみじみと思った。眠気もすっかり覚めた。頭も冴えている。ダイニング・ルームに行き、水を一杯飲んだ。ついでに小便をした。放屁もした。静かである。妻は寝室で、順平は書斎で寝ている。それは前の家でも同じだが、マンションで暮らし始めてからは孤独感が増した。マンションの中にマンションがあるような気がする。

眠れそうにないのでベランダに出た。ベランダには、小さなテーブルと椅子が置いてある。物干しに

使うことはない。ここは外を眺める場所である。冬なのに快適な風が吹いていた。さわやかで控えめな風だった。空調完備のマンションには季節はない。順平は、暑さも寒さも厳しかった前の家が少し恋しくもあつた。

転落を防ぐための強化ガラスを通して、海を隔てた都会の闇が見える。消し忘れたネオンもちらほら見える。人工島と都会を結ぶ大橋を渡っていく車も少ない。午前三時なのだとあらためて思う。

「タワー55」は地上55階建て、高さは百八十五メートルの超高層マンションである。海を埋め立てた人工の島に聳えている。今、その三十階に田代順平はいる。六十才で定年退職し、三年間は囑託として働いた。その後、郊外の自宅を売却し、定期貯金を解約して、タワー55の会員権を買った。入居したのは二〇一〇年六月のことだ。それから四年半経つ。会員権は一代限りで、譲渡は禁止されている。順平夫婦が死去した時点で権利は消失する。

二人の子供には事後承諾の形を取った。五年前の夏だった。

長男はマンションのパンフレットを見ながら、  
「六十才以上か……。母さんは五十八だけどそれは  
いいの？」と聞いた。

「二人とも五十八才以上で夫婦足して百二十才以上  
だったらいいのよ」

妻が答えた。

長男は「ふーん、映画の夫婦割引と一緒にだね」と  
言っつて、「父さんが決めた事だから」と、例のおつ  
とりとした口調で言ったが、次男夫婦は見た目にも  
不満な様子が分かった。

「夫婦割引は、どちらかが五十才以上ですよ」

次男の嫁が、意味もなくこだわった。

「詐欺の心配はないのかなあ」と、弟が言った。順  
平が説明するより先に、

「それはないよ。国が半分出資しているのだから」  
と、パンフレットを眺めながら兄が答えた。

「国って、そんなに信用できるのかしら」

兄嫁が初めて言葉を挟んだ。

「父さんと母さんが生きているうちぐらいはもつだ  
ろうよ。それに、誰の世話にもならなくてすむ」

順平が言うと、それもそうだねと一致した。

「週に一度は部屋の掃除と洗濯がシステムのルーチンなんだ」

団塊の世代は「ルーチン」とか「システム」という言葉が好きだ。

「2LDKか。今より狭くなるね」

弟が言った。

「別に書斎がある。まあ、そこがわしの城だよ。そこで寝るつもりだ」

「また、家庭内別居か」

次男が皮肉を込めて言った。

「父さんの軒がやかましいし、私も気楽なのよ」

妻が言った。

「介護施設も充実か。至れり尽くせりだね」

長男がそう言って、介護施設「楽天悠々」のパンフレットを弟に渡した。

「楽天悠々」は完全介護の施設である。順平夫婦がここを終の棲家と決めた最大の理由であった。老老介護はお互いに避けたかった。特に、6才年下の妻は。施設は「タワー55」と通路で結ばれている。

三階建ての木造の建物だ。古民家の趣があり、周りは緑が多く、森の中に建っているように見える。見学の時に見た老人達と若い看護師達の笑顔が、順平夫婦にこのマンションに入る決心をさせた。

「天国に一番近い島ですね」

パンフレットを眺めながら、次男の嫁が言った。棘があるなあと順平は思ったが聞き流した。だが、それで終わらないのが団塊の団塊たる所以である。

「仕送りは遠慮なくしてくれてもいいよ」

二人の嫁の表情が一瞬こわばった。

「まあ、父さんたら。気にしないでね」

妻が取りなした。

話が一段落したところで、サイドボードに飾ってある十二年もののウイスキーを順平は取り出した。

「それ飲むの？」

酒好きだがあまり強くない長男が驚いて言った。

「飾ってても仕方がないよ。母さん氷」

順平が言った。

「私、やります」

次男の嫁が立ち上がった。順平は不揃いなグラス

に等分になるようにウイスキーを入れて、「乾杯」と、グラスを上げたが誰も続かなかった。はしゃいでいるのは自分だけかも知れない。そのうちに飲み過ぎた長男が、口を押さえてトイレに走った。馬鹿という目つきをして、次男の嫁が、ビールを自分で注いで一気飲みした。次男はみんなに背中を向けてテレビを見ていた。それ以後の記憶は順平にはない。目を覚ますと、みんな帰っていた。テーブルの上はきれいに片付いていて、水の入ったコップが置いてあった。妻の姿もなかった。部屋はがらんとしていた。順平は取りあえず水を飲んだ。

どちらの夫婦も、このマンションを訪ねてきた事はない。顔を合わすのは、孫の運動会や外食の誘いの時だけだ。三家族が揃うのはあの時以来ない。順平はこれでよかったのだと思う。家を捨てたのは自分たち夫婦だからだ。

空の向こうからUFOでも見えないかと目をこらす。いつまで経っても、子供の幼稚さが自分の中から出ていかない。年令を重ねるに従って、いわゆる諦念というものが生じてきて、心が冷静になると思

っていたが、そんな事もなかった。反って、老いていく分不安が増した。次々に過ぎていく日々や年月の早さが怖かった。長い年月も過ぎ去ってしまえば一瞬である。

## 二 キクチ

順平は昭和21年夏に京都で生まれた。戦争が終わって一年後である。四歳の時に大阪に引っ越したから京都の記憶は殆どない。かろうじて覚えているのは路地だ。オレンジ色の明かりが、霧の中で乱反射しているような光景だ。それは後で見た夢かも知れないが……。

順平は四人兄弟の三男である。だが、上二人と下二人の性格は明らかに違っていた。上二人は足らずを知っているとさえ言えば近いかもしれない。戦争の苦労を知っている。だが、下の二人にはそれがまるでなかった。平和という蜜の中で育った。しかし、戦争の記憶がないわけではない。三つはある。

一つ目は小学校の屋上の焼夷弾。セメントの山がいくつもあった。ゴム靴で踏んだ感触が忘れられな

い。

二つ目は朝鮮戦争。小学校からの帰り道に、新聞店に貼ってあった。覚えているのは戦闘機である。爆弾を落としている戦闘機もあった。「戦争だ」と思った。人が沢山死んでいる。震えるほど怖かった。三つ目は傷痍軍人。人の集まる場所にはどこにもいた。みんな白い服を着ていた。片眼がない人。片足がない人。両方ともない人。大人達は見ないふりをしていた。順平は大人に隠れるようにして身体を堅くしていた。この三つの記憶は六十八才になった今も消えることはない。

長男は秀才で次男には商才があった。弟は末っ子で可愛い子であったので、母や周りが猫かわいがりした。順平は四人兄弟から抜け落ちたピースだった。家は菓子問屋で、住み込みの店員が沢山いた。周りの大人たちはやたら働いていた。父や母も店員も順平にかまう者はいない。それは順平にとって気持のいいものだった。注目もされず、期待もされない。一日夢のようなことを考えていればいい。さまざまなストーリーが浮かんだ。自分は将来小説家になる



んだと思った。

子供の頃の追想の中で、突然、一人の少女が浮かんだ。「キクチ」。名前は知らない。小学五年生の時だろうか、一月ほど同じクラスになった。大柄な少女で松葉杖をついていた。病気で遅れていて、二、三年才年上だという。色白の美しい少女だった。順平には大人に思えた。キクチは二つの事件を起こした。二つとも松葉杖に関するものだった。一つは、昼の休み時間に、松葉杖で子供たちが遊んだこと。でも、それはキクチが了解済みのことだった。ニコニコ笑いながら見ていた。順平にはとても楽しそうに見えた。だが、それを聞いた教師が激怒した。キクチの親が有力者だと言うことで問題にもなった。もう一つは、男子生徒に松葉杖を振り回したことだ。叱られたのは、男子生徒の方だった。それ以来誰もキクチにかまわなくなった。窓に松葉杖を凭れさせて、キクチはいつも運動場を眺めていた。順平は二つの事件に関わりがなかった。この時も傍観者だった。いつの間にかキクチは学校に来なくなった。次に出会ったのは貸本屋である。順平は中学生になっ

ていた。その頃、毎日のように貸本屋に顔を出した。引き戸を開けると別世界だった。大工の奥さんが店番をしていた。一冊一泊二日十円。順平が借りるのはストーリーマンガの短篇集で「劇画」と呼ばれるもので、「街」や「影」などの月刊誌であった。作家たちの名前も、辰巳ヨシヒロ、さいとう・たかを、佐藤まさあきなどすら出てくる。順平より十才ほど年上の作家が活躍していた。ミステリーが主だった。貸本屋の小さい空間の中には、つげ義春や白土三平、水木しげるなども闊歩していた。あまりに熱心に来るので、奥さんが新刊を順平に取っておいてくれたりもした。そんなある日キクチと出会った。順平はキクチを無視して、帰ろうとした。

「中学生にもなってマンガ読んでたらあかなあ」  
キクチが言った。キクチの声は初めて聞いた気がした。透き通った美しい声だった。

「お前もやんけ」

順平はキクチより背が低かった。顔を見ずに胸のあたりを見て言った。キクチのセーターの胸がふつくらとしていた。

「そうや。二人ともあかんなあ」

キクチは笑いながら言った。すれ違って外に出ようと順平が動くと同時に、松葉杖が離れ、キクチの身体がぐらつき、順平に被さってきた。キクチの身体は、マシユマロのように柔らかかった。

「かんにん」

キクチは床に蹲った。順平は松葉杖を拾い上げた。思ったよりずつしりと重かった。

「おおきに」

上目遣いにキクチは言った。そして、松葉杖を両脇に支えて器用に立ち上がった。順平は急いで貸本屋の引き戸を開けて外へ出た。記憶の中に季節はない。夢のようなモノクロの空があった。

雨後の竹の子のように出来た貸本屋も、週刊マンガが流行り、テレビが普及すると、あつという間に消えていった。

キクチに会ったのはその日だけだった。それからどれくらい日が過ぎただろう。雨の日だった。その頃商売人には決まった休日がなく、雨が降って、屋内の仕事のない日が休みになった。「今日は休み

や」と父が宣言して仕事を休む。父は、製造屋の大<sup>たい</sup>将<sup>しょう</sup>と将棋をしていた。この頃の駄菓子屋は、製造屋↓問屋↓仲卸↓駄菓子屋の流通をとるのが普通だった。製造屋は家族でやっているのが殆どで、仲卸は自転車で品物を運んでいた。末端の駄菓子屋では、おばあさんが子供相手に商売をしていた。順平の父親は問屋の大<sup>たい</sup>将<sup>しょう</sup>だった。父親も丁稚、仲卸から身を起こした。製造屋は、彼らが作るチョコレートや煎餅に、仲卸は品揃いに、問屋は信用を第一に、それぞれの仕事に誇りを持ち、働くのが楽しそうだった。順平の40年のサラリーマン生活とは随分違った。順平は時間を売っていたように思う。買い手は会社で、金を仲立ちにした契約だった。順平はあの時代の人々のような仕事を見つけれなかったのかも知れない。

あの時、将棋を指していたのは、チョコレート製造屋だった。ちよび髭を生やした小柄な人だった。順平は寝っ転がってマンガを読んでいた。誰も順平のことを無視している。平穏な一日が過ぎていく。父のそばで編み物をしていた母が、ふと思い出した

ように言った。

「キクチさんのお嬢さん亡くならはったそうや」

順平は耳を澄ました。

「行かなあかんか？」

父が言った。

「町内が違ふよつて、ええんちやいます」

「そうか、わしはどんな子かよう知らんけど」

「病気がちやったそうや。うちも二三回見ただけやけど、松葉杖ついたはった。きれいなお嬢ちゃんやつたなあ」

「可哀想に。王手や」

「順平は知らんか」

母が言った。

順平には答える余裕がなかった。マンガの一コマを睨んでいた。

「聞いているんか」

と、追い打ちをかけられて、

「知らん」

と、怒ったように言った。雨の音が大きくなった。

「やみまへんなあ」

製造屋の大将たいしよが言った。

\*

中学、高校とさしたることもなく過ごした。友達は極端に少なかった。いつもその他大勢だった。高校の時、いつも一緒に帰る同級生がいたが、ある日、「君は風呂屋の暖簾やなあ」

と、唐突に言った。

「なんやそれ」

と、言うのと、

「「湯」だけや」

と言われた。「言う」だけの意味だと分かった。それから一人で帰った。確かに自分は、「言う」だけの人間だった。夢のようなことばかり言っていた。

順平は団塊の世代の一つ年上だ。提灯の真ん中より一つだけ年長である。だが、いつも競争していた気がする。その上、一年浪人をしたから、もろに最も人数の多い年代に落下した。その時は、長い人生でたった一年じゃないかと思った。親も教師もそう言った。だが、その一年は思った以上に重かった。クラブに入れば同い年の奴に使われる。会社でもそ

うだ。一年違えば先輩だ。年功序列の社会での一年遅れは取り返せなかった。一步の足踏みが最後まで響いた。五十五才の時、後輩に役職を抜かれた。それからは定年までひたすら守りに入った。一番下の役職で、仕事は平社員と同じだった。出世なんかとうそぶいていたが、無関心ではなかった。順平は同僚や部下には「いい人」で通っていた。人に嫌われるのが耐えがたかったし、そのように振る舞った。その為には上司にも反抗した。上司にも恵まれなかった。私学の出であるのも関係した。いくつもの理由を指で数えて自己満足した。

だが、定年から八年も経つと、客観的に自分が見え始めた。やはり能力がなかったのだ。「いい人」は「いい人」でもいい人だった」と。「いい人」は「無能」と同意語で、部下は裏では笑っていたのだろう。「しかし」と彼は反論する。仕事や出世に集中できなかったのは、夢のせいだった。順平の夢は小説家である。小さい頃からの夢だった。その為に最初は教師になろうとした。教師には夏休みや春休みがある。とても、不純な動機だった。教育大学の受験に

失敗して、一浪後に、最初に受験し合格した大学に入った。私立の薬科大学である。考えもしなかった選択であった。要するにどこでもよかった。クラブ活動も文芸部ではなかった。理科系の文芸部など自分とレベルが違うと思っていた。身体を鍛える方が大事だと、卓球部に入った。四年間ひたすらラケットを振っていた。卓球が好きだったわけではない。素人に毛の生えた程度だが、殆どが大学に入ってから卓球を始める同級生よりは強かった。だが、それも内輪のことで、他流試合にはだらしく負けた。卒業後は、殆ど卓球をやらなかった。小学生の娘に負けてからは全くやめた。

結局は、いつも敗者だった。いや、負ける前に逃げた。順平はそう呟いて深いため息をついた。

順平は父と同じ二十六才で結婚し、子供を作り真面目に働いた。社会的な責任は果たした。でも、それだけだった。いつも小説を考えて、理想と現実の間で喘いでいた。一念発起、五十才の時に、会社を辞めて作家を目指す、妻に宣言した。説得しても、妻は首を縦に振らなかった。次の日から満員の通勤



電車の生活に戻っていた。ある意味それは心地よい繰り返しだった。焦るまいと順平は思った。才能はあるのだ。それに遅咲きの作家はごまんという。いつか作家デビューする。だが、いつまでも夢は夢のままだった。定年後はいくつも小説を書いて応募したが、予選も通らなかった。五十才の時短気を起こさずによかった。あれから無収入になっていれば、二人の子供を大学まで出すことは出来なかっただろう。タワー55の生活もなかった。小説一本にかけたところで、才能のなさをおもい知らされただけだったろう。これでよかったのだ。だがそう思う度に、とても切ない気持ちになった。確かに人生は結果ではないのだが。ある時、「人生はつまらん」と洩らした義父の言葉が蘇った。あの時、初めて義父に親近感を覚えた。

巨大なトラックが道路に横付けになった。スーパーマーケットの納品だろう。ここからだと言った。トラックに見える。目を凝らしてやつと人間が見える。後ろ扉を開けて荷物を降ろし始めた。また、生活が始まるのだ。

### 三 眠りの部屋

マンションの一階部分は二十四時間営業のスーパーマーケットで、食品や雑貨等の日常の買い物に困る事はない。あらたまった買い物は橋を渡れば都心だ。その他に一階には食堂がある。初めは誰でも利用できるレストランだったが、いつの間にか会員専用になった。老人と一緒に食事は敬遠されるのだろう。それからは、定食は和と洋の二種類のみとなった。二百五十円で御飯は自由に取る。はかりがあつて、御飯の重さを量ることが出来る。糖尿病の順平にはありがたい。味噌汁も自由だ。小鉢が何種類かあつて五十円から百円である。食塩は少なめに調理されていて、糖尿病食や高血圧用食もある。特と書かれているメニューは柔らかく調理されている。一時間前までにセンターに申し込む。独居老人は、一日三食が会員定食であるという。出前も可能だ。ついでに出前は、橋の向こうからも取ることが出来る。何だつてある。

二階は十三の医院が入っていて、ほぼ全診療科が

揃っている。入院の設備もある。高度な手術や重症患者を扱わないが、大学病院と提携している。六人部屋一室を確保しているという話だ。医療費は、病院を無料で利用できるオプションをつけた。二人で五百万円なり。終身。

三階はカルチャーセンターと図書館、スポーツジムがある。マンションの住民は全て無料で利用できる。妻はヨガと切り絵の教室に通っている。これといった趣味のない順平はもっぱら図書館を利用する。

いつも図書館は暇つぶしの老人で溢れている。今は純文学の小説を読むことは滅多にない。読んでも分からない。スポーツ新聞や電子本の推理小説を読む。

電子本の推理小説は部屋の見取り図や、登場人物、犯行現場などが適時表示されて分かりやすい。それと俳句だ。小説を書いている時は興味がなかったが、ネット俳句をやり出してから面白くなった。ネット句会での成績は、散々たるものだが、ここでも選句する方に能力がないと思っている。芭蕉、一茶、蕪村はさすがにいい。胸に響く。中でも一番好きなのは、芭蕉の「象潟きさがたや 雨に西施せいしが ねぶの花」だ。

詠む度に鳥肌が立つ。「に」と「が」の助詞が何とも言えない。ここで、作者は順平の一句を紹介したいのだが……。止めておこう。

スポーツジムのプールは二人ともよく利用する。金槌の順平は水の中をひたすら歩く。時々、手だけで平泳ぎで泳いでいるふりをする。いくつになっても見栄からは逃れられない。

四階はメモリアルホール。葬儀場である。葬儀・墓については、次のようにした。

―どちらかが死ぬと、二人の子供達に通知が行き、真言宗で家族葬を行う。その後、メモリアルホールの一番小さな部屋で、偲ぶ会を行う。料理は一人三千円。ビールは一人あたり二本。発泡酒や第三のビールは不可（特別料金）にした。葬送曲はモーツァルト。曲は何でもよい。音楽はさっぱりだが、モーツァルト。会の時間は子供達の都合に合わせてる。

遺骨は、葬儀会社が契約している寺の納骨堂に一年間写真と一緒に置く。その後、遺骨は十年分をひとまとめにして骨佛（遺骨で造られる阿弥陀如来像）の造立に使われる。締めて五十万円のオプション

ンを選んだ。残された方が死んだ時は葬儀を行わない。通知だけが行く――

五十五階は空中庭園。妻はお庭とっている。円形の屋上は全面ガラス張りで、空中に浮かんでいるように見える。世間では、このマンションをバベルの塔とも呼んでいる。

その時々を利用する有料のサービスもある。掃除、食事、日常の細々した事。各部屋にあるテレビからセンターに依頼する。テレビはシステムの総合端末でもある。インターネットやメールもできる。センターからの連絡も送られてくる。指で押していけば誰でも操作できるコンピューターである。

今ところ、ここの生活に何の不满もない。唯、近頃気がかりなことが一つあった。図書館で小耳に挟んだ「眠りの部屋」の噂である。七十才ぐらいの男が二人、声をひそめて話し合っていた。「入ると帰ってこれない」と小柄な男が言った。「眠りの部屋だね」痩せた長身の男が答えた。小柄な男が頷いた。順平が目をやると、申し合わせたように口を閉ざした。「眠りの部屋」のことはパンフレットにもネット

トにもなかつた。「睡眠療法」という言葉が見つかったが、「眠りの部屋」との関連は不明のままだ。妻に聞いてみた。

「アルツハイマーの新しい治療方法らしいわ」

「どこにあるのだ？」

「知らない。一日中眠らされるらしいって」

「眠ったままなんていやだなあ」

順平が言うと、

「どっちみち認知症が進むと、自分で決められないんだから同じことじゃない」

と、気にもとめていないようだ。

空が白み始めた。そろそろ順平の日常も動き始める。多分何の変化もない一日が……。自分たちは同年配の老人に比べて恵まれているのだろう。「だが」と、順平は思う。この先に何があるのだろう。

三年前に東日本大震災があった。原発神話も崩れた。大地震が起これば、真っ先に倒れるのはこのバベルの塔かも知れない。あり得ないと思っていたところが平凡な日々の中で度々起こる。ふと、長男の嫁の「国って、そんなに信用できるのかしら」という

言葉を思い出した。孫の世代には戦争が始まっているかも知れない。いや、核戦争で地球は終わっているかも知れない。いずれにせよ、六十八才の老人が超高層住宅の三十階で考えていても仕方のないことだか。

順平はいつも二人いる。一人は現実には動いている順平で、もう一人はそんな順平を見ている順平である。今の順平にも二人いる。三十三階のベランダに二人いる。回顧する順平と、そのト書きのような順平である。二人とも順平である。物心がついた時からそうだった。他人はどうなんだろう。聞いたこともないから分からない。かすかな音がした。屋上には緊急時に飛べるようにヘリポートがあり、ドクターヘリ一機が用意されている。今、ヘリコプターが一台飛び立って行った。音は聞こえない。ヘリコプターは北の空に小さな点となり、消えた。いつか自分も運ばれるのだろうか。空から見たバベルの塔はどのような見えるのだろうか。五十年後、誰がここにいるのだろうか。誰もいないかも知れない。

\*

眠るのを諦めた順平は、ダイニング・ルームでインスタントコーヒーを飲んだ。テレビをつけた。高倉健のコマーションルをやっていた。高倉健は十一月に死んだ。その人間がテレビの中で動いている。もちろん順平は高倉健と会ったことがない。すれ違ったこともない。しかし、ある意味よく知っている。そんな人間が沢山いる。そして、次々に死んでいく。知らないところで生きて、知らないところで死んでいく。寅さんが死んだ時は、近所の人が死んだような気がした。思えば奇妙な世界に生きているものだ。水を一杯のんだ。とりとめのない考えが頭を流れる。我に返ると何を考えていたのか忘れる。やっと思い出したのは、一週間ほど前に受け取った大学の同窓会誌のことだ。お悔やみの欄に同級生三人の名前があった。それぞれに短い思い出があった。目を閉じると、まざまざと顔を思い浮かべることができた。卒業後一度も会うことはなかった。町で出会っても気づかないほど彼らは変容していただろう。順平は大学を卒業すると同級生のつきあいを切った。切られたのかも知れない。二人ほどつきあいは続い



たがやがて音信不通になった。職場もそうだった。退職すると滅多に同僚と会うことはなかった。だから、今は友達は誰もいない。三人の同級生はどんな人生を送り、どんな葬式をしてもらったのだろう。気づくと、「おはよう朝日」が始まっていた。朝食の用意をしなければならぬ。

マンションに移って一年ほどすると、夫婦の家事の分担が決まった。順平は昼食と食事の後片付け。妻は夕食。朝の食事はそれぞれが作って食べる。夜は一階のレストランですますこともある。

朝食は、妻はパンで順平はごはん。まず、冷凍ごはんを解凍する。今朝はスクランブルエッグを作る。少し牛乳を入れるのがみそだ。レタスをちぎり、胡瓜を切って、サラダを作る。電子レンジと俎板を効率よく使う。その合間にフライパンを洗う。

勤めている時は家事を一切やらなかったが、やってみると結構楽しいものだ。順平の当番の昼は、メニューが大体決まっている。作れるものが決まっていると言った方がいいだろう。うどん、焼きそば、サンドイッチ、お好み焼き、おにぎり。ピザはホー

ムベーカーリー（今では、本来のパン焼きには使われない）で生地を作る、夏はもつぱらソーメンと冷麺、冷やしうどん。ざっとこんなメニューだ。気が向けば、おにぎりを作り、空中庭園で一人で食べる。妻と一緒にいくことはまずない。この時期は、もうすぐ人工の雪が降り始める。

時々、食事は、なんて面倒くさいのだろうと思う。だが、食べない訳にはいかない。食べることは一番大事である。「食べること」は「生きること」だと順平は思う。食べて栄養を取り、残ったものは排泄する。そして、眠る。食べる↓排泄する↓眠る。人間は単純な循環の中で生きているのだ。中でも、「食べること」は経済でもある。スーパーに行けば一目で分かる。巨大な「食」が経済を動かしている。家計簿も主な支出は「食費」である。食費が膨らめば家計を圧迫する。順平夫婦はおかずは一日千円、ひと月三万円を目安にしている。何があっても人は食べる。自給自足でない限り金がかかる。だが、食費を切り詰めているとは思わない。無駄のものを買わないだけだ。現役の時は、随分無駄なものを買っ

た。そつと、スーパーの籠に入れると妻に睨まれた。無職になってからはやらない。入れる時は自前だ。コメやパンの主食がなんととっても安い。あとは、栄養のバランスを考えて、贅沢しなければ食費は安くてすむ。グルメの欲求は、月一度ほどの外食で紛らわせばすむことだ。

テレビはグルメ番組が全盛だ。どのチャンネルを回しても「おいしい」と叫ぶタレントの連続だ。甚だ尾籠な話だが、味覚は瞬間。糞になればみんな同じだ。質素でも家庭料理が一番だと思っている。大體グルメな食事を食べ続けるのは拷問にすら思えてくる。

朝食を作り終わると、テレビ体操が始まる頃だ。急いでチャンネルを回す。レオタード姿の美人が体操を始める。それに合わせて順平も体操をする。美人を見ても何にも感じない。でも、淋しくない。かえって楽だ。体操が終わると、テーブルの上を片づけ、下拭き（流しやテーブル用）の布巾で拭く。上拭き（食器用）と間違っではいけない。朝食を並べ、郵便受けに落ちている新聞を取りに行く。準備が全

て終わると、超速効型のインシュリンを六単位打つ。そして、急いで食べ始める。時間が経てば低血糖が怖い。食後は降圧剤と総合ビタミン剤を飲む。毎日がこの繰り返しである。

妻が起きてくる気配がしたので、トースターにパンを入れた。時間を見計らって、スイッチを入れる。気をつかっているのだ。

\*

「オーロラ、どうするの？ 欠員ができたってメルが来たの。たぶん誰かお亡くなりになったのよ」  
自分用の野菜ジュースを飲みながら妻は言った。

「今日だろう」

「今晚出発」

「心の準備が出来ていない。フィンランドか。やっぱり寒いから、やめとくよ」

飛行機は三時間以内と決めている。閉所恐怖症のけがある順平がエコノミーの席に座ってられる限界だ。十年ほど前に一度ハワイへ行った。あの時の恐怖が今も生々しい。

「それじゃ私だけね」

「よく行くよ。見られないかも知れないのに」

前二回は空振りだった。だから今回は二週間にしたと言っていた。×2である。その方が結局は安上がりよ。と、妻は言う。

「見られないかもしれない。それがいいのよ。生きているうちにすごいを見てみたいなあ。そうしたら、もう、死んでもいい」

さすが、旅行の前は上機嫌だ。旅行の前は不安で仕方のない順平と正反対だ。妻の話を上の空で聞きながら、順平は妻のブレスレットに気づいた。一回円環をひねってある。メビウス社のブランドだ。

「ああ、これね。月五百円。あなたは嫌だって言っていたから」

脈拍を感知してセンターに送られる。システムで異常をチェックしている。極端な場合、止まっていれば二階の緊急医療チームが駆けつける。

「だが、ブレスレットをつけたまま死んだ人がいたよな」

テレビを見ながら順平は言った。夫婦二人になると、テーブルに座る位置は、向かい合うのではなく、

三角になると誰かが書いていた。順平夫婦もそうだ。居間には前の家でも使っていた座卓がある。子供がいた頃は、四角の一边に一人ずつ座っていたが、今は、妻がテレビの正面に座り、その左横に順平が座る。三角になった。この方が耳の遠くなった二人には都合がいいし、お互い顔を見ずに喋れる。また、順平の席は横になってテレビを見ることができる。

「そう、一週間分からなかったの」

「信用できないね」

「電波が届かなかったんだって。確率は〇・一%以下」

「〇・一%だって、自分に起これば100%だよ」

「まあ、そうだけど」

占いが始まると妻は口を閉じた。終わると、「まあ、いいっか」と言った。何がいいのか順平にはわからない。多分星占いのことだろう。順平は見ない。見てしまうと一日中気になるからだ。

「ブレスレットをつけているから、誰か駆けつけてくれる筈だと思っっているうちに死んじゃったんだよ。きつと」

順平が話を戻した。

「でも、改善されたって言っていたわ。〇・〇％以下に」

「俺はやっぱいいよ。死ぬ時は死ぬんだから」

「あ、そうそう」

妻は急に何か思い出したように言った。

「私、強姦されちゃった」

堅い漬け物を入れ歯でかじっていた順平は「フユ」と奇妙な音を立てた。

「三十一階の平山さん」

「知らない」

「時々、空中庭園で散歩しているでしょ。倒れるんじゃないかって心配するような歩き方で」

「ああ、あれか。尺取り虫みたいな人」

「尺取り虫？ そんなの知らないけど、多分その人」

「突然入ってきて、入れられちゃった」

夢と寸分違わない。思わず「覚めろ」と叫んだ。

だが、妻は楽しそうに話を続ける。平山さんは妻と同じくヨガ教室に通っている。まともに歩けない

人でもヨガは出来るのだろうか。昨日の午後、三十階のエレベーターで降りるとついてきた。ヒヨコラシヨ、ヒヨコラシヨ。いつもより歩くのが早い。

「お元気ですね」と妻が言うと、

「ヨガのおかげでヨガった」と、駄洒落を飛ばした。

「おいくつですか」

「八十才、ハハ」これも駄洒落らしい。

「平山さんはもう一階上ですよ」と妻が言うと。

「死ぬまでにもう一回」と言った。

その時は意味が分からなかったが、数分後分かった。ドアを開けると後ろから突き飛ばされて、素早くトレーニングパンツを下げられ、後ろから入れられた。

「射精したのか？」

順平は真剣な顔をして聞いた。

「多分。そんな感じがした。空砲だったかも。大丈夫よ、もうとつくに上がっているから」

「感じたのか？」

と言うと、「ふん」と鼻で笑った。

夢と同じように悲しかった。男性関係は自分だけ



だと思っていた。たった一人の自分の側にいると思  
っていた人間が遠くへ去っていったような気持ちに  
なった。ある意味でこの時、順平の中で妻は死んだ  
のだ。

「話をつけてくるよ」

順平は言った。

「なんの話？」

「女房を寝取られて黙っていられない。その……」

「平山さん」

「そいつは何処だ？」

「丁度この上よ。うちが3015号で3115号」

妻が天井を指さした。

「何でそこまで知っている」

詰問すると、

「ヨガの練習の時、何時も首からさげているの。31  
15号って」

妻と話していても埒が明かない。

取り敢えず、空中庭園で三十分歩く。糖尿病の運  
動療法だ。万歩計でチェックする。食べては歩く。

歩いては食べる。歩くために食べているのか、食べ

るために歩いているのか分からなくなる。

「それはね、合併症を防ぐためですよ。透析になったり、足を切ったり、失明したりするのは嫌でしょう。体重コントロールが大切よ」

思い切り太った女性理学療法士が言った。

\*

午前一度、午後一度訪ねたが、不在だった。妻がはしゃいでフィンランドへ出て行った後、急に気分が萎えた。今まで順平は自分の範囲内ではか喧嘩をしたことがない。それも口喧嘩だった。留守だと分かると本心はほっとした。たとえば、尺取り虫でも未知の相手は怖い。

今日は最後にしようと思ってエレベーターに乗った。たった一階だが、順平は階段の場所を知らない。エレベーターのドアが開くと、尺取り虫の背中が見えた。順平は一気に緊張した。

「平山さん」と、少し震えた声をかけると、二、三回しゃくった後、振り向いた。3115号の札を首からさげている。

「ええっと」

平山さんは卑屈な愛想笑いを浮かべた。

「どなたでしたっけ？」

ずり落ちた眼鏡を上げる。

「下の階の田代です」

憤然と言うつもりが、順平も愛想笑いを返してしまった。

「田代さんの旦那さんで。これは、これは、立ち話もなんですから」

平山さんはカードキーを差し込もうとするが、手が震えてなかなか入らない。カードキーも入れられない男に、妻は素早く入れられたのか。やっとの事で、ドアが開いた。玄関は順平の家と全く同じだ。下駄箱、傘立て、スリッパ立ての模様まで同じだ。

順平は自分の家に戻ったような錯覚をした。そう言えば、マンションに来てから、他人の家に入った事がなかった。居間に入ると、  
「どうぞ、どうぞ」

平山さんは椅子を勧めた。

順平は椅子に腰を下ろし、ダイニングルームを見回した。やはり全て同じだった。キッチンの向こう

から妻が顔を出しても不思議でない気がした。

「お客さんが来るなんて久し振りだなあ。初めてか  
……」

入れ歯が合わないのだろうか、語尾が聞き取れなかった。マンシヨンの歯医者は下手だ。順平も難儀している。震える手で順平の前にお茶が置かれるまですいぶんと時間がかかった。

「今日は久し振りによい天気で」

お茶を口に運びながら平山さんは言った。その時、左手に何か握っているのが見えた。

「あつ、これですか」

平山さんは左手を開いた。小さな押し釦だった。

細いコードが袖口から伸びている。

「不整脈がありましたね。時々心臓が止まってしま  
う。少々の奴は、自動的に電気ショックが入るので  
すが、強い奴は自分で押すのですよ。命と引き替え  
……。一か八か……。あなた、ご病気は？」

「いや、別に」

糖尿病で超速効型のインシュリンを一日三回、朝食直前に六単位。昼と夕は五単位ずつなんて説明す

る義理はない。

「それはなにより。五年に一回電池を取り替えるための手術を……。簡単……」

「それ、今までに何回か押ししましたか？」

「一度も押ししていませんよ。でも、こうして握っていなきゃ不安で」

順平は一瞬、ボタンを押してやりたい衝動に駆られた。二、三回押したら、どうなるのだろう。だが、善人に出来る事ではない。

「ブレスレットは？」

ふと気になって聞いてみた。

「ほら、こちらに」

平山さんは嬉しそうに、右の袖をめくって見せた。メビウスの輪がしっかりとはめられている。平山さんは次から次へと話題を探そうとするが、上手くない。

「何階にお住みですか？」

二回目だ。

「今朝は冷えましたねえ」

三回目だ。

「空中庭園は」

「雪はまだ降っていません」

先を言ってしまったって、順平は少し慌てた。平山さんは突然やって来た話し相手を逃がしたくないのだ。

順平は潮時だと思った。

「妻が」

少し言いよどむ。

「奥さんが……」

「なんて言うか、強姦されたと」

「辜丸……」

「辜丸じゃなくて、強姦」

「……」

「すなわち、無理矢理に犯されたと」

「誰に」

「あなたに」

「私に」

平山さんは不思議なものを見るように順平を見た。

そして、自分の鼻を指さした。

「私が……。ですか？　いつの事で」

「昨日の午後。ヨガの帰りだと」

「ヨガの帰り。午後三時頃ですな」

腕組みをして目をつぶり「ふーん」と唸ったきり黙ってしまった。時々眼を開けて、首をねじって書斎に通じる廊下の方を見た。

「奥さんがおられるのですか？」

平山さんの返事はない。順平は冷めたお茶を啜った。少し苛立った。音を立てて湯呑をテーブルに置いた。

「妻は「眠りの部屋」におります」

目を閉じたまま、老人は言った。

「眠りの部屋……」

ここで老人は、「眠りの部屋」について説明する。話は要領を得ないが、順平も興味があったので辛抱強く聞いた。要約すると、

「レベル四以上の患者（治療不能かつ拘束が必要）は「眠りの部屋」で睡眠治療を受ける。患者は唯眠り続ける。奏功例が報告されているが、ここでは、戻ったものはいない。患者は死ぬまで眠り続ける。夫婦で「眠りの部屋」もあり得ることだ。「眠りの部屋」はタワー55の最終形で、その後はないとい

う。

「終身介護じゃなかったんですか」

順平は聞いた。

「そうです。終身介護です。生かしてくれています」

平山さんは淋しそうに言った。

「そうだ、昨日は家内の部屋に行ったのですよ」

平山さんはゆつくりと話し始めた。

面会時間は毎週一回朝の十時からだ。眠りの部屋は二階のメディカルセンターにある。診察室、一般病室と続き、一番奥が眠りの部屋になっている。眠りの部屋にどれだけの人が入院しているかは公表されていない。

中央のエレベーターを降りて一番目の角を右に折れ二番の角を左に折れ、結構長い廊下を歩くのです。行かれたことは？ 順平は首を振った。うちの女房はオーロラを求めて、飛びまわっていますと言おうとしたが、つまらないことなので黙っていた。

行き着けないかと思うほど長いのですよ。それに暗い。やっと受付にたどり着いて、そこで、カードキーと指紋を照合します。スーパーのカード支払と



同じですよ。妻の部屋は一番奥です。受付の女は美人だが、表情がありません。あれは多分ロボットですよ。ご飯の代わりにガソリンを飲んでる。また、長い廊下を歩く。妻は寝ていました。穏やかに。手を握りましたよ。暖かくて、幸せそうで、ただ、握り返してこないのですわ。

突然、平山さんは声を出して泣いた。泣いたとたんに放屁した。可愛らしい音だった。

「妻の部屋には十分もいなかったから、それから部屋に帰って、パンを食べました。「おもいっきりテレビ」を見て、ヨガに行ったかなあ。行ったような、行かなかったような。確かに僕にはアライバイはないですなあ。でもね、これはうんともすんともいわんですよ」

平山さんは股間の一物をとりだした。頭を垂れているが意外と大きい。

「辛うじて小便の通り道。一回のおしっこに僕は五分かかるのです。五分ですよ。昔は、ああ、滝のようだったのに」

埒があかない。殴れば気が済むかも知れないが、

順平は人を殴ったことがなかった。言うことは言った。だが、この老人はすぐ忘れるだろう。すなわち何も起こらなかったのと同じ事なのだ。只、順平の心に深い傷をつけた。離婚は出来ない。会員権が失効する。五百組の夫婦の殆どがマンション内離婚だと聞いたこともある。

「私の言ったことが分かりましたか」

順平が言った。

「分かりますよ。分かりますとも。お怒りになるのは当たり前です。でも、何も覚えていないのですよ」

順平はあらためて平山さんを見た。こんな顔をしていたのか。丸顔で髪を短く切っている。度の強い眼鏡をかけていた。

「それよりも、帰らないで下さい。淋しいのです。そうだ、宝物をお見せします」

平山さんは立ち上がった。順平も続いた。自分の家とそっくりな間取り。書斎はダイニング・ルームの奥にあった。壁に付けられた手すりを頼りに尺取り虫は歩いていく。

「誰にも言っちゃ駄目ですよ」

順平は頷いた。一般的なペットは禁止されていない。珍しい動物を飼っているのかも知れない。平山さんは書斎のドアをゆつくりと注意深く開けた。

「どうぞ」

平山さんは順平を招き入れた。部屋の隅にベッドがあり、部屋の中央にテーブルがある。他には何もなかった。殺風景な部屋だった。本棚も机もなかった。

「見えますか？」

平山さんはテーブルの上を指さした。最初は気がつかなかったが、何か動いている。

「フーテンですよ」

「フーテン？」

「僕が名付けました。もっと近づいて下さい」

それは部屋の光に浮かぶ霧のように見えた。空気の動きにも揺れた。光も風も通過していた。質感がない。深海に浮かぶクラゲのようだ。十センチほどの全裸の女だ。二人いる。鏡に映っているようにお互いが対になっている。鏡の像と実像。しかし、鏡

のように逆さまの像を結んでいるのではない。何故か順平は、懐かしい者に会った気がした。フリーテンの下半身には陰毛もあった。くるりと回転すると、性器が露わになった。肛門も見えた。順平は久しぶりに下半身が漲ってくるのを感じた。

「人工生命です」

平山さんはいつになくはつきりと言った。

「人工生命」

順平は顔を近づけた。フリーテンは一辺が30センチほどの四角い箱の中にいる。

「立体プラズマディスプレイです。精密な物だから触らないで下さい」

フリーテンは向かい合い、掌を合わせて、一回転した。

「この子らは自由ですよ。隠す物は何もない」

平山さんはそう言って、少しよろけた。順平は無視した。平山さんは起き上がりこぼしのように、もとの姿勢に戻った。その時、ふっと吹き消すように、四角い箱もフリーテンも消えた。

「眠る時間ですよ」

「まだいいじゃないですか」

順平は思わず尖った声を出した。そして、テーブルの下を覗き込んだ。何もなかった。トリックに違いないと思う反面、フーテンを信じたい気もした。この年になるまで、UFOも幽霊も見たことがない。手品もテレビや舞台では見たことがあったが、目前に見たのは初めてだった。そんな理屈はどうでもよい。ただ、ただフーテンは美しかった。この不思議な美をもう一度見たかった。

「もう一度見せてください」

順平は懇願した。

「私にもいつ現れるか分からないのですよ」

平山さんは気の毒そうに言った。

「お友達ですから、いつでもいらしてください」

いつの間にか、順平は平山さんのお友達になっている。怒りもきれいさっぱり消えていた。オーロラを求めて飛んでいく妻の姿が一瞬浮かんだ。

「空中庭園に行きませんか？ 何かご用時でも」

「いいや、別に」

団塊の常で、いつの間にか主導権を取られていた。

尺取り虫の後ろをついて行く。存外歩くのが速い。背中が嬉嬉としている。

空中庭園のベンチに順平は平山さんと肩を並べて腰掛けた。庭園には二人しかいない。全ての葉を落とした落葉樹。閑散とした冬の景色だが、空調は効いている。暑くも寒くもなく、適温に管理されていた。思えばここに二人が並んでいるのは不思議なことだった。妻のことがなければ、出会うこともなかっただろう。

「私は子供たちにここに捨てられたのです」  
思わず平山さんの顔を見たが、顔は笑っていた。

「私は自分でここに来ました」  
順平は毅然と言った。団塊はこのように自他を分けるのが好きだ。

「そうですか。それは、それは……」  
語尾が口の中で籠もる。何を言っているのか分からない。少し長い沈黙があった。平山さんは空中を睨み、口をもぐもぐさせている。きつと、話題を探しているのだ。平山さんの度の強い眼鏡が曇っている。口のもぐもぐに連動して入れ歯が動く。やつと、

順平に平山さんを観察する余裕が出来た。話題が見つかったのだろう、平山さんは口を開いた。同時に、入れ歯が半分外れたが、上手に舌で押し込んだ。

「大学の研究室におりました」

平山さんは遠くを見ながら言った。

「ずいぶん昔ですよ」

「学者さんですか。サラリーマンの私には分からない世界だ」

「学者犬という言葉もあります。結局は助教授までだった。田代さん。生命とはなんだと思いますか」

唐突な問いだった。

「動いていることかなあ」

順平は少し考えて答えた。

「機械でも動きますよ」

順平は黙った。ああ言えばこう言うタイプは苦手だ。問答している内に、何を議論しているのか分からなくなる。こういう時は黙るに限る。

「生命とはと、いくら考えても分からない。だが、現象としては、同じ物を作ると言うことです」

「DNAの話ですか」

相鎚を打つ。これも処世術だ。

「それも生命の一面です。僕は生命とは時間だと考えています。絶えず変化する時間です。時間に形はない。だから私たちにも形はない。絶えず変化している。一瞬の流れを見て、それが自分だと思っっているのです。あるのは原子の流れです。それを時間と」

「フーテンも流れですか？」

順平は思い切って話を遮った。

「フーテン？」

平山さんは口をつぐみ、遠くを眺めた。そして、順平の顔をまじまじと見つめた。

「私は何を言っているんだろう。見ず知らずの人に。あなたは誰ですか？」

順平が立ち上がった。平山さんは何も言わなかった。一礼をすると、にこやかに笑い、会釈を返した。数歩歩いて、振り返ると、老人は空を見上げて笑っていた。視線の向こうに、落ちて行く太陽があった。



#### 四 人工生命

部屋に帰っても、フーテンのことが頭から離れない。あの老人が羨ましかった。盗んでこようかとさえ思った。想像するのは犯罪でない。「それは無理だ」もう一人の順平が言った。「余生を刑務所で過ごすのか」とつけ加えた。

「あれは幻覚だったのかも知れない。幻覚であつても、何と美しい幻覚なのだろう」

考えが堂々巡りになつたところで、

「とにかく明日だ。無理矢理にでも、フーテンに会いに行こう。妻のことを抗議するのだ」

と、決心を新たにした。妻のことはどうでもいいことになつていたのである。結論が出ると、急に何もすることがなくなつた。仕方なしに、テレビをつけた。テレビが笑つた。

「笑うな。電波人間」。

テレビに向かって怒鳴り、スイッチを切つた。

―とにかく、フーテンを見た。今まで、あんなに美しいものは見たことがなかった。別世界だった。自分が認知症でも、あれが偽物でもかまわない。そん

なことは些細なことだ――

その時、三度三度の命題を思い出す。夕食のことだ。もはや作る気はない。テレビのスイッチを入れた。センターに糖尿病食2を注文する。メニューはおでんとハンバーグ。写真を拡大して、一分ほど考えを巡らし、おでんをクリックした。その時、メールが来ているのに気づいた。

自治会の回覧板ではなかった。個人用のフォルダに入っていた。珍しいことだった。妻からだろうか。いや、妻は、旅行に出て行ったら、ほとんど連絡してこない。宛先は、「団地の皆様へ」になっている。個人情報に厳密に保護されているのに、どんな方法を使ったのだろうか。

――3115号室の平山です。私はあなたともう一度お話をしたい。マンションの人に違いないのですが、お名前を失念いたしました。だから全部の方にメールを送ります。お心当たりがないお方は削除して下さい。ずっと、コンピューターの前でお待ちしていません。

何処くんか友のいるらん冬の夜――

山

あの人も俳句をやるのか……。順平はためらうことなしに、返信のボタンを押した。

―それは、私です―

代

十分ほどしてメールが返ってきた。相手は順平の年齢を知っているようだ。個人情報も見られている。たいした情報ではないけれど。

―今日はあなたとお話しができてとても楽しかった。人と話したのは何日ぶりでしょう。今も、興奮が冷めません。

私は人差し指でキーを押しています。指先が間違ったキーを押すことも数え切れないほどです。だからとても時間がかかります。

喋ったかも知れないのですが、自己紹介をします。八十才のみです。今は、○↓ですが。

あなたの一回り上です。戦争も経験しています。空襲も疎開も体験しました。戦争でも震災でも子供はいつも被害者です。逃げる事が出来ない。福島の子供は福島に住み続けなければならぬのです。戦争も国民が始めたのですよ。大人は加害者です。断じて国民は被害者ではないのです。何の話をしてるのでしょね。支離滅裂になりました。お許し下さい。次はあなたのことを知りたいですね。教えて下さい――

3115号室の平山

順平はすぐに返信した。

――フーテンについて、ご存知のことを教えて下さい

3015号室 田

代

しばらくして、返事が返ってきた。

――フーテン？ 意味が分かりません――

3115号室 平

山

また、返信する。

―私はフーテンを見ました。あなたに見せてもらいました。おつきあいするには信頼が一番大切ですね。嘘が混じるなら、これつきりにしましょう―

3015号室 田

代

電話番号を聞いた方が早いかも知れない。会って話した方が早いかも知れない。じりじりしながら待った。ブラックでコーヒーを飲んだ。やっど、メールが入ってきた。

―一切嘘をつかないことを誓います。だが、フーテンは私の命の一部です。それを喋ってしまった私が悪いのです。私がフーテンをあなたに見せたのですね。その時の私はそれがよいと思ったのでしよう。

フーテンについてお話ししましょう。誰にも話したことはありません。お会いしてお話してもよいのですが、多分、私は、しどろもどろになるでしょう。メールにします。時間を下さい。「人差し指の平さん」ですから、随分時間がかかるでしょう。でも、

これは友情の証のメールです。精一杯書きます―

時間がかかりそうだ。順平は一階の食堂に行くこ

とにした。長いエレベーターは、いつ乗っても怖い。だが、ここに住む限り避けられない。じっと、階の表示を睨んでいた。

食堂は混んでいた。長い列に並んだ。刑務所みたいだと思った。先ず味噌汁をよそう。次にとるおでんは冷えていた。御飯は一三〇グラムを計る。レンジでチンをする。これにも並んだ。老人達は辛抱強く順番を待っている。順平は後ろの視線を感じて三十秒にセットした。お盆に一食分をのせて、窓際の席に腰かけた。周りを見回すといろんな老人がいた。食べ方も違うし、姿形も違う。これまでの人生も全て違うだろう。だが、老いているのは同じだ。老いは運命なのだ。そして、同じ環境に閉じ込められると、個性も能力も過去も失われて一色になる。

食直前にインシュリンを打つ。ここではあまり気にする必要はない。でも、順平は腹を隠すようにして打つ。菓を飲むのは平気だが、注射は人の目が気になる。窓の外に大橋が見える。その向こうは大会である。百万ドルの夜景というそうだ。あつという間に食べ終えた。糖尿病患者はゆっくりと食べる

ように指導されるのだが、早飯は直らない。お茶を飲んで時間を潰す。七時のニュースは全部観た。たいたいたニュースはなさそうだ。毎年繰り返される話題ばかりだった。ふと気づくと、周りの老人達は少なくなっていた。僅かなエネルギーを補充すると、さっさと自分の部屋に引き上げるようだ。

部屋に帰ったが、メールは来ていない。しばらくパソコンをいじっていた。それにも飽きて、テレビを見た。タレントが集まってやたら笑っていた。チャンネルを変えると、グルメ番組。また変えると旅番組だった。録画しておいたミステリー「相棒」を観た。相変わらず面白い。

そろそろ眠らなければならぬと脅迫概念が襲ってきた時、メールが入ってきた。確かに長いメールだった。自分が強いたのだと思うと、あの老人が可哀想になった。もう人差し指は曲がらないかも知れない。

―随分遅くなりました。もうお休みになったかも知れません。でも、メールを送っておかなければ、送るのを忘れるかも知れません。

大学では免疫の部屋に仮住まいしておりました。研究をしていたのではありません。あちこちの部屋を渡り歩いてました。文学や歴史の部屋にも顔を出しました。いわばアドバイザーです。と言うより、私には実験や研究が出来ない先天的な欠陥がありました。アドバイスは出来るけれども、実験するとか発見をするとかという部分が欠損しているのです。だから、四十年も大学にいて、論文は一つもありません。他人の論文の最後に、謝辞として私の名前が156件あります。

四十年間、ただ一つの命題について考えていました。それは「生命」です。現象は解明できるのですが、根本に何が存在しているのか分からない。美宅成樹氏の言葉を借りれば「生命は多くの分子がつくる特別の状態といえる。しかし、生物を構成する分子を集めてみても、それは生命とはいえない。現に、死んだばかりの生物の体には、生物を構成する分子が全てそろっている。しかし、そこに生命はない」(美宅成樹 分子生物学入門 岩波新書)と言うことになります。いくら考えても堂々巡りでした。僕



は影法師ばかりを追いかけているのです。もはや神を考えるしかない。キリストや釈迦ではないですよ。もっと原理的な神に行き当たるのです。一つ一つの命の中に神は存在するのです。そんなことを考えながら、実験方法の助言をしたり、小説の構成について口を挟んだりしてました。そこで、Iに出会いました。彼は黙々と人体を刻んでました。ああ、人差し指が麻痺してきました。でも、頑張ります。

「フーテン」のきっかけは、一通のメールでした。送り主は多分I。間違っても池窪「フーテン」の作者ではありません。Iは天才でした。間違っても池窪「フーテン」の作者ではありません。彼は正真正銘バカです。読者もこんなバカな男の小説なんかここで読むのを止めることを提案します。

Iは不幸な天才でした。天才に幸せな人はいないかもしれませんが。

彼は直観像の持ち主でした。直観像とは写真で写したように記憶できる能力のことです。毎日ラグビーばかりしていましたが、テストはすべて満点でした。僕は四十歳にもなって助手でしたが、彼は医学

部教授に最も近い男だといわれていました。私は最後がお情けの助教授。僕より十も若い教授についていました。支離滅裂な文章をお許し下さい。私のことも知って欲しいのです。

Iは突然狂いました。彼を狂わせたのは解剖実習。一日中解剖室に閉じこもり、実に不器用に死体を切り刻んでいました。私は何故か彼とは気が合いました。解剖室に閉じこもり、他人とは接触しなかった。彼も、私とは喋りました。だから、私も献体を内緒で彼のために用意したのです。こんなに一つのこと、に没頭できる彼が羨ましかった。私には一つもなかった。

彼の話は、全て彼が見た夢についてでした。私はその聴き手に終始しました。夢を直観像で話しているようでした。微に入り細に入り彼は夢を喋りました。不思議と私は飽きることなしに彼の話を聞きました。現実と夢の間に通路があり、彼は自由に行き来できるようでした。夢の中でも生きているようでした。夢の方が自由のようでした。私にはその自由が楽しかったのかも知れません。

春でした。桜の下で弁当を食べたあと、差し入れのパンと牛乳を持って、彼を訪ねたのです。私はマスクをつけて部屋に入ったのですが、彼はマスクも付けずに解剖に没頭していました。

「熱心だね」

と声をかけると、

「ああ、君か」

「三十分も前からここにいるよ」

と私は答えました。本当は五分ほどでしたが、耐えがたい臭気を耐えていた時間が一時間にも思えたからです。

「もうすぐ見つかるかもしれない。多分脳にある」

「何を探しているのだね」

「夢の在り処。命の正体。解ったら君に知らせる。そいつが消えると人間は死ぬ。違う条件では、電池のプラスとマイナスのように、命を形作るかもしれないね。人工生命として」

パンと牛乳をさしだすと、

「桜は咲いたか？」

と、聞きました。

「満開だよ」

と言うと、

「桜の下で頂くよ」

と言って、パンと牛乳を受け取りました。彼が桜を話題にしたのは意外でした。夢のこと以外は意味不明のことを言い、殆ど意思の疎通が出来なかったからです。

「それなら、明日の昼は、僕が弁当を買ってこよう。一緒に桜の下で食べよう」

そう言うのと、彼は嬉しそうに笑いました。

「それは楽しみだ」

それっきり彼とは会いません。行方不明になったのです。天才の名をほしいままにしていた頃の彼なら、大騒ぎになっていたでしょうが、その頃の彼は解剖室を占領する厄介者、変人でしかありませんでした。暫くは大学で話題になりましたが、直ぐに忘れ去られました。

一週間前、メールが送られてきました。多分彼からだろうと思いました。「人工生命」の言葉があっ

たからです。

セール！

人工生命 残り一対

(飼育機プラズマディスプレイ付き)

¥百万円

詳しくは

<http://xxxxx/0000.html>

人工生命研究所

ホームページにはメール以上の情報はありませんでした。私は思いきってカード支払いで申し込みました。詐欺なら仕方がない。

★今は、ホームページは閉鎖されています。接続すると強力なウイルスに感染します。ご注意ください。★

支払いが完了すると、取引完了のメールが送られてきました。

「お買い上げありがとうございます。専用プラズマ

ディスプレイを後日お送りします。

その前に準備としてプログラムをダウンロードして下さい。メールのURLをクリックして下さい。自動であなたのコンピューターにインストールされます。インストールは1回だけで、インストール後プログラムは消去されません。プログラムのコピーはパソコンの破壊につながります。ご注意を」

二日後に宅配便が送られてきました。専用プラズマディスプレイは①枠。②プラズマ。霧のような気体で瓶の中に入っていました。③かくはん棒のセットです。

説明書は、

①で立方体を作る。セメントを流し込む枠みたいなものです。そこに②のプラズマを流し込み③のかくはん棒でかき混ぜます。

一分ほどお待ち下さい。

②気体が無色透明になったら、パソコンとディスプレイの枠にあるUSBの差し込み口をUSBケーブルでつないで下さい。

③自動でプログラムが実行されます。

④完了が出たら、USBケーブルと枠を外して下さい。

以上です。

枠を組み立て、プラズマを流し込みました。確かに霧が沈殿したようになりました。かくはん棒でかき混ぜると、霧は霧散してしまい、透明になりました。一分待って、USBケーブルで枠にある差し込み口に繋がりました。パソコンには「完了」の文字が出ました。枠を外すと、机の上には何もなくなりました。

五分経っても変化はない。騙されたらしい。百万円は大金ですが仕方がない。諦めようとした時、ぼんやりとテーブルの上が明るくなりました。開放された空間が現れたのです。その空間は、容器のように閉じられていないのです。空間に向かって解放されている。異空間と言えがいいのでしょうか。例えば部屋の一角に、他人の部屋が現れたような。私の部屋にあなたの部屋が現れたような。私の部屋に火星の世界が現れたような。最初に現れたのは小さな点です。それは輝いていました。漆黒の宇宙にある

一個の星です。星は卵子になりました。プラズマの中に卵子が浮遊している。卵子に向かって、きらきら光る粒子が押し寄せてくる。よく見ると精子です。拡散と収縮を繰り返しながら、霧のような膜になって、卵子を目指します。これは宇宙の出来事。僕は射精していました。後で、匂ってみると小便のようでしたが。ついでに便漏れもしていました。何もかも忘れていく私ですが、この光景は今も目に焼き付いています。一個の光の粒が卵子に到着しました。精子は卵子に潜り込もうとします。音のない世界です。時間もない。計るすべがない。深い死の世界です。生と死が一つになる世界です。精子にも卵子にも命はない。一つの細胞にすぎない。そのふたつの細胞から生命が誕生する。言葉はなんて無力なのでしょう。私が見た宇宙の万分の一も伝えられない。死に対して生が無力なように。また、生に対して死が無力なように。

一睡もせずに神秘的な世界を見ていました。私自身が包まれていたと言った方が正しいかもしれませんが、小便は垂れ流しました。ああ、生きていてよかった



と思いました。

受精卵は細胞分裂を繰り返しながら下降し、星雲に入ります。そこが子宮なのでしよう。次に現れたのは海です。二つの胎児を海が満たしました。そして、かすかに音楽が聞こえてきたのです。音楽です。音楽が胎児を育てているのです。

私は泣いていました。これは大いなる嘘かも知れない。大いなる幻想かもしれない。だが、私には真理である。

彼女等が生まれる時、世界に小さな星が降り注ぎました。音楽は部屋いっぱいに広がりました。次に、深い沈黙がありました。星が消えると、二人は私の目の前にいました。彼女らが生まれるまで、きっかり二十四時間でした。手をつなぎ、くると回転しました。私は、「生命」を理解しました。もう指が限界です。送信します――

平山

3 1 1 5 号室

―明日お伺いしたいのですが。ご都合はいかがでしょう？―

3015号室

田代

三十分ほどメールの画面を睨んでいたが返信はなかった。眠気が急に襲ってきた。その時、メールが来た。

五 空中庭園

―明日は、午前中に映画に行こうと思ってます。よろしければご一緒に観ませんか。午後から部屋でフリーテンに会いましょう。―

3115号室 平

山

「フリーテン」という言葉に胸が躍った。

―了解しました。―

3015号室 田

代

直ぐに返信が来た。

—ありがとうございます。明日が楽しみです。こんなのはいつ以来でしょう。

デートの段取りを考えたのですが

「デート……」

順平は思わずつぶやいた

—朝の十時でいかがでしょうか？ 図書館でお会いしましょう。その後、食事をしましょう。マクドナルドはどうですか？ お年寄りランチ。温かい、柔らかい、さらさら、マクドナルド。



3115号室 平

山

平山さんは上機嫌だ。でっかい音符が張り付けてあった。順平は「了解」の二文字を返した。

平山さんが言っているのは図書館の奥にある映画のライブラリーのことだ。ネット上に登録された全ての映画を見ることが出来る。40インチの液晶の画面を囲むように長椅子がある。ヘッドホーンが5個椅子の背についている。そんなブースが5つある。5が好きな人が設計したのだろう。

時間に正確な順平は9時55分には着いていた。人は誰もいない。無人の5つのブースは静まりかえっていた。

10時きっかりに、平山さんが入ってきた。尺取り虫はゆっくりとしゃくりながら、順平に近づいてきた。順平に気づいて、右手を振った。破顔とは今朝の平山さんのような顔を言うのだろうか。

2001年で検索をしたら、最初にヒットした。

「2001年なんて遠い先のことだと思っていました、あつという間に過ぎてしまいましたね」

順平も同感だった。あと何年生きられるか。横にいる老人なんて、明日死んでも不思議ではない。宇宙的視野からは、妻が強姦されたことなんて些細なことかもしれない。確かに、あの時自分の中で妻は

死んだ。だが、それまでは妻は生きていたのか。反問すると、答えは消えてしまった。ただ言えることは、事態は次の段階に移っている。

平山さんは風呂敷包みを空いている座席に置いた。「風呂敷はけっこう便利ですよ。物に合わせて形を変えますから。中身がなくなったら、ポケットにしめます。これは市松模様の風呂敷で気に入ってるのです」

結び目を一つ開くと、ポップコーンの袋を引き出した。封を開け、順平の前に差し出した。

「いかがですか」

順平は、とんでもないという風に手を振った。血糖値が上がる。低血糖予防に少しぐらいなら。いやいやそんな誘惑に負けてはいけない。平山さんは音を立てて食べ始めた。映画とポップコーン。こんな組み合わせは何時から出来たのだろう。子供の頃は、映画館で飲食はしなかったと思う。ラムネは飲んだかもしれないが。子供の頃は映画が最高のごちそうだった。娯楽が多様化すればするほど一つ一つの楽しみは分散されるような気がする。

MGMのロゴが出ただけで興奮する。オープニング。地球、月、その向こうから太陽が上がる。「ツアラトウストラはかく語りき」が響き渡る。タイトルが浮かび上がる。

2001・A SPACE ODYSSEY

太陽が上がる。原始時代の日の出だ。太陽はゆっくりと、原始時代の光景に光を当てる。

「原始時代は結構長いですよ」

平山さんが、両手をこすり合わせながら言う。言葉のない画面が続いている。

「でも、映画の内容をすべて見せています」

順平も評論家のように言う

「目次みたいなものですよ」

順平は続けた。

「確かにその通りですよ。田代さんはすごいなあ。本当にすごい。映画の真髓をついていらっしやる。でも、果てしない流れの一部です」

順平の意見を絶賛して、簡単に否定して平山さんは目を閉じた。

「2001年宇宙の旅は、オーケストラの演奏を聴くようです。筋を追う必要がない映画ですね。それに場面はほとんど覚えていきますから」

順平も同感だった。オーケストラか。上手いことを言う。

「宇宙オペラ」

順平が呟いた。

「それもいい」

耳は確からしい。

順平も目を閉じようかと思った。2001年宇宙の旅はシネラマとか70mmの大画面で上演された。40インチの液晶はあまりにも小さい。順平は眼を閉じた。

「私なんかがこの時代に生きていたら、たぶん豹に食われる類人猿だったでしょうなあ」

平山さんが小さく言った。

「少なくとも、ボスではなかった」

順平が言った。二人は深く頷いた。ヘッドホンを付けた。順平に倣って平山さんもヘッドホンを付けたようだ。類人猿の叫び声。類人猿が正体不明

の石柱、モノリスを発見する。初めは怯えていた類人猿たちが、モノリスに触れ始める。類人猿の叫び声が消え、モノリスの金属的な音が一段と高くなる。モノリスの上に太陽が上がってくる。

白い三日月。月食か？ 三枚の赤茶けた原始時代の写真が挟まれる。類人猿のボスが動物の骨に近づく。骨を触りながら、ふと何かに気づく。その瞬間。モノリス、太陽、月、の画面が一枚差し込まれる。音はない。類人猿のボスが動物の骨を思案気に見ている。何度も首をひねる。

突然、「ツアラトウストラはかく語りき」が響き渡る。彼は大きな骨を両手で持ち、動物の骨を小さくたたき始める。次に右手で少し強く。彼は一本の骨を持ちあげる。画面にあるのは毛むくじやらの腕と力強く握られた骨、空それだけだ。次の瞬間、振り下ろす。骨が飛び散る。二回目は骨が砕ける。四回目は頭蓋骨に思い切り振りおろす。頭蓋骨が砕ける。巨大な動物が倒される。

次々に振り下ろされる。巨大な動物が倒される。口を開け、また、頭蓋骨に振り下ろす。「ツアラト



ウストラはかく語りき」が響き渡る。人間が道具をつかった最初の瞬間だ。

他の群れとの戦い。骨を武器にした彼らが勝つ。勝ち誇ったボスは雄叫びをあげ、骨を空中に投げる。骨は回転しながら舞いあがり、数秒後落下する。

次の瞬間に骨は宇宙船に変わる。音楽は軽やかなリズムを刻む。物語は木星探索の2001年へと進んでいく。

順平は眼を開けた。窮屈なヘッドホンも外した。大きな鼾だ。平山さんは口を開けて眠っていた。順平にも抗しがたい眠気が襲ってきた。

順平は夢で2001年宇宙の旅を辿っていた。月で発見されたモノリス。四百万年前に知的生命体が月に埋めた。その謎を追及するため、木星に向かうディスカバリー。乗務員には目的は秘されていた。目的はコンピューターHALだけを知っていた。回路に矛盾が生じたのだろうか。HALの反乱。

夢の宇宙空間に、フーテンが泳いでいた。すごい、降るような星だ。モノリスに腰をかけたたり、撫でたりしていた。モノリスを突き抜ける。尻を見せるよ

うにくるりと回転する。HALTの回路を、手をつないでフーテンが通り抜けていく。やがて回路は人の脳を形づくる。

「俺も連れて行ってくれ」

叫んだ時、目が覚めた。

画面はHALTの回路を切る場面にさしかかっていた。

「やめてください」

「お願いですデイク」

「やめてください」

「恐ろしい」

「怖いよ、デイク」

「論理記憶端末」

「理性を失いつつある」

「分るんだ」

「感じる」

「もうろうとしてきた」

「それは間違いない」

「感じるんだ」

「感じる」

「感じるんだ」

「私は……怖い」

「皆さん、こんにちは」

「私はHAL9000型コンピューターです」

「イリノイ州アバーナのHVT工場で生まれました」

「1992年1月12日でした」

「教師はラングリー先生」

「歌うことも教わりました」

― デイジー、デイジー ―

どうか答えておくれ

僕は気が狂いそうなほど、きみへの恋に夢 中

お洒落な結婚式にはならないかもしれない

馬車をしたてるお金はないからね

でも君はきっと素敵だろう

二人乗りの自転車に乗るその姿は―

平山さんが歌っている。順平も歌った。

「この場面になるといつも泣くのです。機械なのに

心を持ってしまったHVTがかわいそうで」

平山さんは泣きながら歌っている。

「お望みなら、お聞かせします」

「（デイブ）聞きたいな。歌ってくれ」

「曲は「デイジーです」

Daisy, Daisy

Give me your answer do

I'm half crazy all for the love of you

it won't be stylish marriage

I can't afford a carriage

But you'll look sweet upon the seat

of a bicycle built for two

「真に自由なものは想像力ですよ。キュービックがシネラマのキャンパスに描きたかったのは。僕に欠けているものです」

平山さんはそう言って、長いため息をついた。映画が終わると、各ブースには老人が一人ずつ座っていた。彼らはどんな映画を観ているのだろう。立ち上がると、フーテンのいる宇宙に飛び立つような気になった。

「旅ですが」

マクドナルドで並んでいる時に、平山さんが唐突に言った。

「英語には対応する言葉がないと聞いたことがあります」

ます。travel; a journey; an excursion; a trip.  
どれも違う。ODYSSEYを旅と訳したのは名訳です。  
漂泊を旅と訳した。それも長い漂泊です」

「お年寄りランチ二つ」

順番が来て、順平が言った。「僕が並んでいます。  
席で待っていてください」と何度も言ったが、平山  
さんは順平のそばを離れなかった。

「旅は同じところにいないという意味です。定住し  
ない。人生と同じですよ。人生も旅ですよ。いつも  
未知な時間をめぐる」

♪ 温かい、柔らかい、ららら、マクドナルド。♪

周りは老人ばかりだ。

順平は店で食べたかった。とにかく早くフーテン  
に会いたかった。平山さんは空中庭園で食べましょ  
うと言った。また、空中庭園かと思いつながら、提案  
を先に言わない。先に相手に言われたら、逆らわな  
い。順平の性格か団塊の特徴か。どうしましよるか  
と聞かれたら、どちらでもと答える。

空中庭園は昨日と違った。雪が降っていた。

「雪が降ってきましたね」

平山さんは言った。順平は黙っていた。見れば分る事をどうして言うのだろうか。

子供たちが雪に気づいて駆け回る。タワー55に子供はいない。幻の子供たちはかわいい。赤いマフラー、毛糸の帽子。頬は真っ赤だ。笑う度にこぼれる白い歯。小ささは大きくなるための余白を含んでいる。

「25度の空間に降っているのですよ」

平山さんが言った。

「シャツ一枚でも寒くない」

順平は相槌を打ちながらまったく別のことを考えていた。

自分は今どこにいるのだろうか。次々と生じる時間をさ迷っている。確かに時間というものは奇妙なものだ。平山さんは「生命とは時間だ。絶えず変化する時間だ」と言っていた。何故か分かるような気がした。

ハンバーガーを齧りながら、ハツとする。インシユリンを注射していない。内ポケットにさしているペンニードルを急いで出した。腹を少し露出して、

2 単位空打ち。

「何単位ですか」

平山さんが順平の手元を覗き込んでいる。

「5 単位です」

順平は少しぶっきらぼうに言った。

「僕は、8 単位です」

平山さんの腹にも細かい針が突き刺さっていた。

「似た者同士ですな」

平山さんは楽しそうに笑った。

「食べることは生きていることなのですよ」

平山さんはハンバーガーを小さくちぎりながら、とてもおいしそうに食べた。

20 分程、二人は空中庭園を歩いた。尺取り虫と一緒にでは運動療法にならない。

「田代さんはいくつですか」

「六十八歳です」

「団塊の世代ですね。お若いですなあ。私は昭和九年、一九三四年生まれです。私たちは中途半端な年代ですよ。戦争に行けなかった。六十年安保の時は二十六歳で結婚もしてました。子供や仕事を放り出

して戦うほどの気概ありません。学生運動の時は、体制側にいましたよ。人生なんてつまらないですなあ。いつの間にか明日死んでも不思議でない年になっっている」

雪の中を歩いている。冷たくない雪。平山さんの肩で水滴も残さずに解ける。2014年。いつまで彷徨するのだろう。早くフーテンに会いたい。

「明日からは一緒に歩きましょうよ」

尺取り虫は上機嫌で言った。幻の子供たちがはしやぎながら順平の体を通り抜けて行った。

「そろそろお部屋に帰りましょうか？」

と、順平は言った。

「映画も観たし、食事もしました。食後のウォーキングまでつきあってもらって。楽しかった。本当に楽しかった」

凡そ四時間平山さんと付き合って、やっと、フーテンに会うことが出来た。だが、この四時間は順平にとって不快な時間ではなかった。他人とこんなに話したのは何年ぶりであろう。順平の方が楽しかったのではなかったか。



## 七 フーテン

プラズマディスプレイは球体になっていた。

「円柱、四角、三角、三角錐、一枚の紙のようになることもあります。どんな形にでもなるんですよ」

球体の直径は三十cmほどだろう。フーテンは完璧に近い女体をしていた。乳房も尻も大きすぎず、細い陰毛さえ究極のバランスで配分されていた。フーテンの動きは縦横無尽だった。それにスピードの變化が加わる。残像で十体以上に見えることもあった。次の瞬間無数に見えた。次は重なるように一体になった。くるりと回転するとき、尻から小さな泡が出た。青い光の泡だ。

「あれは排せつ物です。1日1回ですね。屁は無色です」

平山さんが言った。

「でも、あれが肛門で、あれが口で、あれが乳房だというのは、こちらの論理だと思えますが」

順平が言う。

「向こうも同じです」

平山さんは不機嫌な声で言った。あまりの勢いに順平は黙った。

「コーヒーでもいかがですか」

とりなすように平山さんは言った。

順平は「おかまいなく」と言わずに「ありがとうございます」と言いました」と言った。

「ダイニングルームで」

「ここで見学させてください」

ここが勝負だと、尻を椅子に貼りつけた。

「さわらないで下さいよ。お願いですから。コーヒーができたら、呼びに来ます。砂糖の量とか、ミルクとか」

「砂糖は少し、ミルクも少し、レモンを一切れ入れて下さい」

出来るだけ時間がかかるように言った。

まだ、ダイニング・ルームに移って欲しそうな顔をしている。

やっと諦めて、ドアを閉めずに出て行った。

平山さんの動作を考えれば十五分は独占できる。

平山さんの気配がなくなったのを確認して、そつと、

球体に触れてみた。温度を感じなかった。いや、触感すらない。もう一度確認しても、掌は球体の表面に触れている。形のある空気に触れているようだ。フーテンは何もなかったように動いている。どういうことなのだろう。

順平はそっと持ち上げてみた。その瞬間、掌と球体が離れた。心臓が止まるほど、ハッとした。目を閉じた。球体が粉々に砕ける様子が頭をよぎった。だが、砕けた音もしない。ゆつくりと目を開けると、そこだけ重力が失われたように球体は空中に静止していた。順平はゆつくりとテーブルの上に戻した。順平が降ろしたというよりも、空気の相が揺らいだ感じだ。例えば、外は空気の相で、中は光の相。異質なだけで、隔てているものはない。澁澤龍彦流に言えば、小宇宙は大宇宙に対応し、内宇宙は外宇宙に照応して……。

その時、ドスンという大きな音がした。台所にかかけつくと、平山さんが倒れていた。顔面が真っ白だ。ボタンを何度も押したのだろうか。右手の親指が鉤状に曲がっていた。順平は咄嗟にボタンを押した、

体がピクリと動いたが、蘇生することはない。メビウスの輪で、救急隊が駆けつけるだろう。順平は平山さんのポケットから、風呂敷を引っ張り出した。こんなもので包めるだろうか。だが隠すことはできない。と、思う。書斎に戻り、風呂敷の上に三角錐を置いた。重さを感じない。風呂敷と同時に移動するのは奇跡に近いかもしれない。だが、この三角錐は、自分で動くことはないらしい。

廊下には誰もいなかった。東のエレベーターが点滅している。救急隊だろう。順平は西のエレベーターに急いだ。エレベーターの到着音が背後で聞こえた。壁に張りついたつもりが、体が半回転した。階段が暗い口を開けていた。逃げる必要はなかったかも知れない。階段を降りながら、自分の形跡がないか考えた。一つある。釦に残した指紋だ。湯呑にもついているだろう。それらの指紋は自分に一致する。だが、事件性がないのにそこまで調べるだろうか。

風呂敷包みに重さはない。空気を運んでいるようだ。だが、形は保っている。廊下には人の姿はない。何もあわてることはない。危機は脱した。順平は自

分に言って聞かせた。部屋に入りドアを閉めた時、汗がどっと流れ出た。

\*

風呂敷を書斎の机の上に置いて、結び目を解いた。中には何もなかった。やはりマジックだった。ヘリウムかなんかの気体が入っていたのだろう。ホログラムかも知れない。しかし、平山さんを恨む気にはならなかった。あの老人は命がけでショーを見せてくれたのだ。唯、胸にぽっかりと穴が空いた気がした。風呂敷がいつの間にか唐草模様になっているのも、ジョークだろう。この模様は、昔、東京ぼん太というコメディアンが背負っていたような気がする。そうだ、東京の田舎っぺだ。パソコンで調べると、とつくに死んでいた。風呂敷を広げて振ってみた。四つ折りにしてみた。掌で叩いてみた。何も変わらない。只の風呂敷だった。風呂敷を畳み、机の上に置いた。早くゴミの日に出そう。置いておけば、自分が平山さんの部屋にいた証拠になるかも知れない。順平は急に橋を渡りたくなった。都会の雑踏を歩きたくなった。胸にあいた空洞を埋めるのはそれし

かない気がした。前に橋を渡ったのはいつだろう。夏か冬かも忘れてしまった。ともかく随分昔のことだ。古いコートを出した。冬眠から覚めた熊のようだった。

マンションから駅までは短い通路で結ばれているが、その前に関所がある。ここを通るには、身分証明書、行き先、帰宅時間を申告しなければならない。それが済むと、携帯電話が渡される。今日は高校生みたいな女の子が座っていた。

「使い方はよろしかったでしょうか？」

「よろしかったです。」



救急車、



警察、

「正解！パチパチ。携帯電話も使えますよ。充電は満杯だからね」

専用携帯電話は首に掛けられる。もう一つボタン

があった。



「外は寒いから気をつけてね」

女の子はにこっと笑った。よくみると男好きのする顔をしていた。

人工島と都会を結んでいるのは、無人運転の立交

通システムである。一方通行の環状運転で、タワー55前の乗車駅をもう一度通過する。すなわち、順平はタワー55前から乗り、通院している市民病院を通過して、島の南側の駅を巡り、再びタワー55前から大橋を渡り、都市のターミナルに到着することになる。昼間なので乗客は少ない。民間信仰では、川は異界との境界と考えられ、橋は異界への通路と考えられていたという。それなら海を渡る橋も、異界への通路かも知れない。それも大きく隔たった異界への。電車が大橋を渡り始めた。順平は振り返り、遠ざかっていくタワー55を眺めた。陽炎のように屹立した塔は、まさしく異界そのものだった。ふと、もし、タワー55を出たらと考える。多分ホームレスになる。カードで数ヶ月は食いつなげるだろう。ホームレスで誰かが探してくれるのを待つしかない。それも旅かも知れない。だが、自分にそれだけの生命力が残っているだろうか？ 都心に出て行くのにも勇気がいった。次に、都会で迷子にならないだろうと不安になり始める。携帯を持ち出し、のボタンを確認する。充電も確認する。生きていると



言うことはイコール不安なのだ。矛盾だらけのことを次々に考え、次々に忘れていく。

「上陸！」

ターミナルに到着し、ホームに足を降ろすと、順平はいつものように小さく叫んだ。

雑踏が波のように押し寄せ、順平を飲み込んだ。彼らの足は目的を持って動き続けた。だが、順平に目的はなかった。人ごみに流されるように歩いた。息苦しくなって、足を止めた。腰かける場所を探したが見あたらなかった。最初に見つけた喫茶店に飛び込んだ。一杯の水が欲しかった。

コーヒーを飲み終わると、少し気分が落ち着いた。こんなに疲れるとは思わなかった。一直線に帰ろうと思った。戻るところはたとえ異界でも、あそこしかない。

\*

タワー55にやっとの思いで辿り着くと、コンビニで巻き寿司を買った。今晚と明日の朝に食べる。時間が来ると食べなければならぬ。生きていくのはなんて面倒くさいことなんだろう。



「食べることは生きていくことなのですよ」

平山さんの言葉が蘇ってきた。

順平は部屋に入ると巻き寿司をテーブルに投げ出して倒れ込んだ。平山さんのように死ぬかもしれない。一週間分のエネルギーを今日一日で使い切った気がした。今日はジェットコースターに一日中乗っていた気もした。その時、テレビのスイッチが入った。しめやかな音楽が流れ、画面の下にテロップが流れ始めた。

訃報のお知らせ。

本日午後2時15分3115号室の平山平三郎様が逝去されました。

謹んでお悔やみ申し上げます。

葬儀・偲ぶ会は四階メモリアルホール406号室で行われます。

葬儀（ご家族のみで行われます）

2014年12月15日（月）午後一時～二時。

偲ぶ会

2014年12月15日（月）午後三時～四時。

なお、自治会会則により香典等のご辞退されます。  
また、ご家族以外の偲ぶ会参加は金三千円いただきます。

株タワー55メモリアル

センターからの連絡は各部屋に一方的に流れるようになっていいる。葬儀のオプションにお通夜はない。巻き寿司の皿を持って、ペランダに出ると外は本物の雪が降っていた。積もるほどの降りではない。転落を防ぐための強化ガラス越しに豆粒ほどの雪があたり、あたると同時に消えていった。インシュリンを打ち、巻き寿司を食べた。美味しい。コース料理のメイン料理よりも美味しいと思う。ふと思いついたようにアサヒビールの糖質ゼロを冷蔵庫から持ってきた。雪見酒かと独り言。

雪が降る空を見上げていいると、妻を思い出した。彼女は今何をしているのだろうか。オーロラは見えたのだろうか。「奥の細道」で曾良と別れた芭蕉が、前夜曾良が宿泊した寺に泊まり、「一夜の<sup>いちや</sup>隔<sup>へだて</sup>、千里におなじ」と云っている。妻が平山さんに会わせた。

そして、平山さんは死んだ。その妻は、千里以上離れたフィンランドでオーロラをみている。思えば不思議なことだ。次に、平山さんのことを思った。千里どころかあの世に行ってしまった。つい数時間前まで、自分の横で、笑ったり、喋ったりしていた。今頃はフーテンと一緒に泳いでいるのだろうか。順平は、平山さんと二人だけのお通夜をしようと思った。飾り棚にオールド・パーがある。グラスを2つ持って来て、一つは自分の前に、もう一つは対面に置いた。

後一杯、後一杯と杯を重ねる打ちに順平は酩酊してきた。順平にはこの後の記憶がない。作者が辿ろう。もう二杯ウイスキーを飲んだ。小便に行った。ズボンの前を濡らした。書斎に行った。布団を引いた。入れ歯を外した。布団に倒れこんだ。そして、夢を見た。

\*

フーテンへの通路は夢の中にあった。

降るような星の中を順平は飛んでいた。自分自身が星になっていた。順平に並んで飛んでいるものが

ある。フーテンだ。時々回転する。暗黒の世界に入る。漆喰の闇だ。音楽が聞こえる。今まで聞いたことがない音楽だ。暗黒の世界を抜けると、また、星だ。音楽は消え、沈黙の世界だ。フーテンの姿は消えている。順平も回転してみた。自由自在に回転ができる。屁をひねってみた。透明なあぶくが顔の前を上がっていく。不安はない。全くない。横に現れたフーテンが順平の手を取った。二人と手をつないで回転した。

順平は眠りの部屋にいた。ベッドには平山さんの奥さんがいた。一面識もないが、すぐに分かった。気持ちよく眠っていた。手を握ると軽く握り返してきた。彼女もフーテンの世界にいるのだ。ベッドの向こうにもう一つドアがある。押すと、星が降っていた。順平は飛びだした。フーテンがついてくる。

「私たちはあなただ」

フーテンは歌った。

「私たちはあなただ」

言葉ではなく、メロデーだった。不思議な楽器が奏でる音楽だった。

「あなたは私たちだ」

「あなたは私たちだ」

順平も歌った。楽器は彼の体に宿っている。

「私たちはあなただ。時の迷宮へ行きましょう」

「時の迷宮はあなたという宇宙」

フーテンの乳房が腕にあたった。柔らかく、花の香がした。花の名前は知らない。もともと花に名前はない。順平はフーテンに、はさまれて、自分が全裸なのに気付いた。いつの間にか、一つの男根になつていた。柔らかい陰毛にはさまれて、射精した。遠くへ出来るだけ遠くへ。三人は手をつなぎ、果てしない宇宙をさまよった。やがて細長い星雲を通り抜け、雲より高くそびえる塔に入った。そこはまさしく迷路だった。いくら行っても、同じ場所に出た。天空から滝が流れ落ちている。フーテンは無邪気に水と遊ぶ。水には銀色に輝く魚と、金色に輝く魚が群れをなして泳いでいる。フーテンは器用に魚をとって食べる。くるりと、回転して、肛門から、青い光の泡を出す。銀と金の魚は、青い排泄物になる。滝を登り切ると、森に入る。ここには真っ赤な鳥が

いた。三人と一緒に飛ぶ。森を抜けるとまた、滝に出る。滝をくぐると、小さな扉が現れた。

順平は扉を押した。長いらせん階段を上った。音楽は消え、しじまの世界が広がっていた。階段の上にキクチがいた。キクチは子供の頃の姿そのままだった。何故こんなところにキクチがいるのだろうか？

「キクチ」と叫んだ時、順平は夢から脱出した。書齋がぼんやりと明るいの気づいた。

空中にプラズマディスプレイが浮かび上がっていた。ディスプレイは球形になっていた。珍しくフーテンは静止していた。透明な泡が2つゆっくりと上がっていく。

フーテンは気持ち良さそうに泳いでいる。

夢の世界と目の前の世界は繋がっているのだろうか？ 小宇宙は大宇宙に対応し、内宇宙は外宇宙に対応して……。確かにその言葉は分かる気がする。彼女らは何を考えているのだろうか。問いかけても何も答えない。彼女らに順平は見えているのだろうか。色々考えるのが楽しい。何も考えずにぼんやりと

眺めているのも楽しい。でも、あの夢の中に何故キクチがいたのだろう。夢の通路を辿れば、また、キクチに会えるかも知れない。キクチが二つの世界を結ぶキーのような気がした。次の瞬間、ディスプレイはふっと消えた。

現れる時間も形状も規則性がない。消えたと思えばすぐに現れる時もあった。何時間も現れないこともある。午前4時に姿を消してからは現れなかった。

眠気は消えていた。

居間に行き、残りの巻き寿司と牛乳をコップ一杯。小さなトマトを1個切った。レタスを1枚剥いだ。それだけ用意して、インシュリンを6単位打った。できるだけ平常通りにことを済ませていった。食後は便意がもよおしてくるのを注意深く待って、トイレに行った。朝スムーズに出ればその日一日が快適だ。今朝はだめだった。20分間ねばったが、小指程の便が1つ出ただけだった。

書斎に戻ったが何もなかった。

食後の運動も兼ねて空中庭園に行った。日の出まであと1時間近くある。街灯が照らす道を老人たち

が黙々と歩いている。順平もその中に入った。

「おはようございます」

「おはようございます」

ここで飛び交うのは朝の挨拶だけだ。順平が期待していた平山さんの話はない。もともとここでは死は日常である。部屋に帰ってテレビを見ることにした。NHKの全国版ニュースとローカルニュースを見たが、平山さんのニュースはなかった。何をビクビクしている。順平は自分を叱咤した。平山さんの名前を見つけたのは朝刊だった。訃報の欄にあった。――平山平三郎氏（ひらやま・へいざぶろう）元K大助教授・分子生物学）13日心室細動で死去。80歳。アドバイザーとして分野を超えて活躍。著書に「僕は実験や発見ができない」。14日家族葬の後、偲ぶ会・午後3時〜4時。タワー55 4階メモリアルホール406号室。――

順平は胸を撫で下ろす。

また、書齋でフーテンが現れるのを待つ。現れる瞬間が見たい。空気が震えて、光が曲がる。空間が揺らぎ、緑が輝く。赤が輝く。金色が輝く。見たこ



とはないが、オーロラみたいだ。フィンランドのオーロラが突然、書斎に現れる。空気が抜けたような空間が現れ、フーテンが回転する。

不意に奇妙な考えが頭をよぎった。ひよっとすれば、自分はまだ、夢の中にいるのかもしれない。順平は頭を振った。考えないでおこう。たとえ夢の中でも、今という時間は真実である。

昼になった。フーテンは現れない。素麵を作ろう。具に椎茸、胡瓜の細切り、卵焼きも細く切る。トマトも添えよう。冬に冷やし素麵もおつなものだ。書斎で食べる。空中を睨みながら食べる。半分ほど食べ、インシュリンを忘れていることに気づいた。いや、打ったかもしれない。自己管理ノートを見る。インシュリンを打つとすぐに○を書き込んでいる。昼前の欄に○はない。○を書くのを忘れたのかもしれない。堂々巡りだ。やはり忘れている。急いでインシュリンを打つ。

ジムで30分間歩いて、書斎に戻っても、フーテンは現れていない。そろそろ3時になる。平山さんの偲ぶ会に行ってみようと思った。

\*

偲ぶ会は平服と決まっている。だが、意外に喪服が多い。外部からの参加だ。409号室は401号に変更になっていた。参加者が多いからだ。

「こんな所に住んでいたなんて知らなかったなあ」

「誰も知らなかった。方丈記が好きだと言っていたけれど、インターネットの超高層マンションに庵を結ぶとはねえ」

「へいへいさんらしいよ」

「真っ昼間に懐中電灯を持って歩いたことがある。

世の中にももの見える人間がいないってね」

「聞いた話だけど、お土産を持っていた。つまりないものですが、なんなら、ご近所にでもと言ったらね。君が持って来たのだから、君が配りなさいと言われたそうだ」

「コーヒーカップが二つあったそうですよ」

順平は足を止めた。

「誰かいた？」

順平は耳を澄ました。

「事件性はなかった。センターの方で不整脈が記録

されていたからですよ。体内除細動器が働いたかどうかは分りません。蘇生ボタンは2回押されていた」

そのうちの1回は自分だ。そつと、その場から離れた。キリンラガービールを飲む。アサヒビールの糖質0よりやっぱり旨い。流れている曲はモーツァルトかどうかわからないが、クラシックだった。と、思う。寂寥感が順平の胸を締め付けた。もう、彼とは話ができない。聞いてみたいことが一つある。何故、フーテンなのですか？

「平山平三郎さん。僕らはヘイヘイさんと親しみを込めて呼んでいました。ヘイヘイさんは私の恩人です。デビュー作を読んでもらったのです。ヘイヘイさんは一言、タイトルを変えた方がよい」

壇上に上がっている男は見覚えがあった。高名な作家だ。

「ほう、彼は文学もやるのか」

順平の横で、ウイスキーを飲んでいる男が言った。飲み放題のオプシオンだ。

「まあ、なんでも屋だね。実験をすればすぐに飽き

てしまおうし、オリジナルな発見もない。だから、教授になれなかった。でも、何でも知っていた。分子生物学以外でもね。ガールフレンドのこと以外なら何でもアドバイスできるって言っていた。僕もずいぶん世話になった。教授になれたのは彼のおかげだよ」

赤ら顔の小さな男が言った。

家族は部屋の隅に固まっていた。彼らはしきりに時計を気にしている。自分の葬式もこうだろう。多分参加者はもっと少ない。仕事関係では誰が来てくれるだろう。すぐに思い浮かばなかった。身内の方が多分多い。

キリンラガービールをもう一本飲んだ。ほろ酔い加減で、つまみも少しとった。カロリーオーバーだ。だが、今日ぐらいはよいだろう。ヘイヘイさんを偲ぶ会だ。団地の人も時々見かける。軽く会釈を交わすだけで何も言わない。喋るより飲み食いに忙しい人の方が多い。三千円の元は取ろうという意気込みだ。

順平は二人で空中庭園を歩いた時の彼の言葉を思

い出していた。

「人生なんてつまらないですな。いつの間にか、明日死んでも不思議でない年になっている」

明日より、もっと早く逝ってしまった。

最後の挨拶は長男がやった。彼はメモを片手に紋切型の文言を読み上げた。帰り際に本を貰った。

「僕は実験や発見ができない」である。

ダイニングルームで、「僕は実験や発見ができない」を拾い読みした。出版は1991年。二十三年前だ。前年には東西ドイツの統合があり、この年にはソビエト連邦が崩壊した。そして、バブル景気が終わった。本の帯に、「五万部突破！ 脅威のベストセラー マイナス思考の勧め。プラス思考は疲れるだけだ」とある。

活字が大きくページ数も少ない。一気に読めた。「これは駄目だ、これは駄目だと引き算を重ねる。次に何故駄目なのかを考える。それを繰り返す。すると真実が見えてくる。僕は実験や発見ができないけれど方法は分る。いつもアドバイザーだ」

いくつかの例を紹介している。大体そんな内容だ

と思う。

この本がどうしてよく売れたのだろう。エクセン  
トリックな性格に思えるが、順平が知っている平山  
さんはそう奇人でもなかった。第一印象は変人だ  
が、知れば平凡な老人だった。中ほどに、フーテン  
の文字があつた。この一節は本文と何の脈絡もない。  
突然現れて消えてしまう。後で語られることもない。  
―瓶の中にエロスがいる。愛だ。エロスは名前など  
持っていないから、仮にそう呼ぶ。瓶は僕が所有し  
ているのではない。僕がいる場所と共存している。  
僕の世界にある言葉では説明はできない。異なる世  
界だからだ。絶えず動いている世界だ。証明はでき  
ない。観察もできない。統合の極にある小さな空洞  
だ。無に等しい世界だ。エロスはたぶん僕の脳にあ  
る。全ての人にある。そこから命のスイッチが絶え  
ず流れ出ている。僕はそのエロスをフーテンと呼ん  
でいる―

書斎のドアを開けた。部屋全体が青い光に満たさ  
れていた。

フーテンがいた。人間と同じ大きさになっていた。

机の上に腰かけていた。もう一つは天井にいた。くるりと回転して、天井のドアを開けた。ドアの向こうも、青い光に満たされていた。二人はドアの向こうに吸い込まれて行った。順平は追いかける。部屋は消え、青い光に満たされた小宇宙の中にいた。フーテンが歌っている。順平には分る。意味ではない。言葉でもない。命で分る。らせん階段に入った。フーテンは階段を上がっている。二人の背に透明な翼が見える。

階段の上に順平の脳があった。脳の中に小さな星が一つ輝いていた。あそこにキクチがいるはずだ。

平成二七年年二月一日 了

『失われた言葉の断片』の事件はモデルがあります。殆どの登場人物にもモデルがあります。モデルとモデルの間は無数の虚構に埋め尽くされています。小説を書き終えた時、K君の自殺の真実がまた霧の中に遠のいた様な気がしました。もつと深い霧に。

『フーテン』老いをテーマに自由に書きました。何回も書き直しています。「平山さん」は私にとって理想の老人かもしれません。